31
346

俳諧一口噺

序

明治三十九年九月より明治四十年二月に至る間「國民新聞」に掲載したるものを輯む。

もと順序も系統も無き隨筆なれど今一冊に纏むるに當つて略

美文

雜文

文話

俳話

の順序に排列したり。本來の性質より雜の部多きを占

序

め、且つ雜のうちにも文話あるべく文話のうちにも俳話あるべく、固より截然たる區劃を爲し得たるに非らず。

初め多少の取捨を試みんと欲せしも、一を除き二を除けば終に進んで全部を除かざるべからざるに至り呆然として自失し、愁ひに一章をも除かず。

明治四十年三月二十一日

虛子識

目次

目次

法隆寺……一
法隆寺の鐘……四
修竹林……七
一大發見……九
勸公……一三
十二社雜記……一五
三階……二〇
中秋無月……二二
「清水」の面……二四
防風……二五
夢……二七
新海非風……二九
氷……三二
富士の頂上……三三
修善寺紀行……三六
五六本の松……三九
桂川……四〇
白雲……四二
富士の夕日……四五
車中……四八

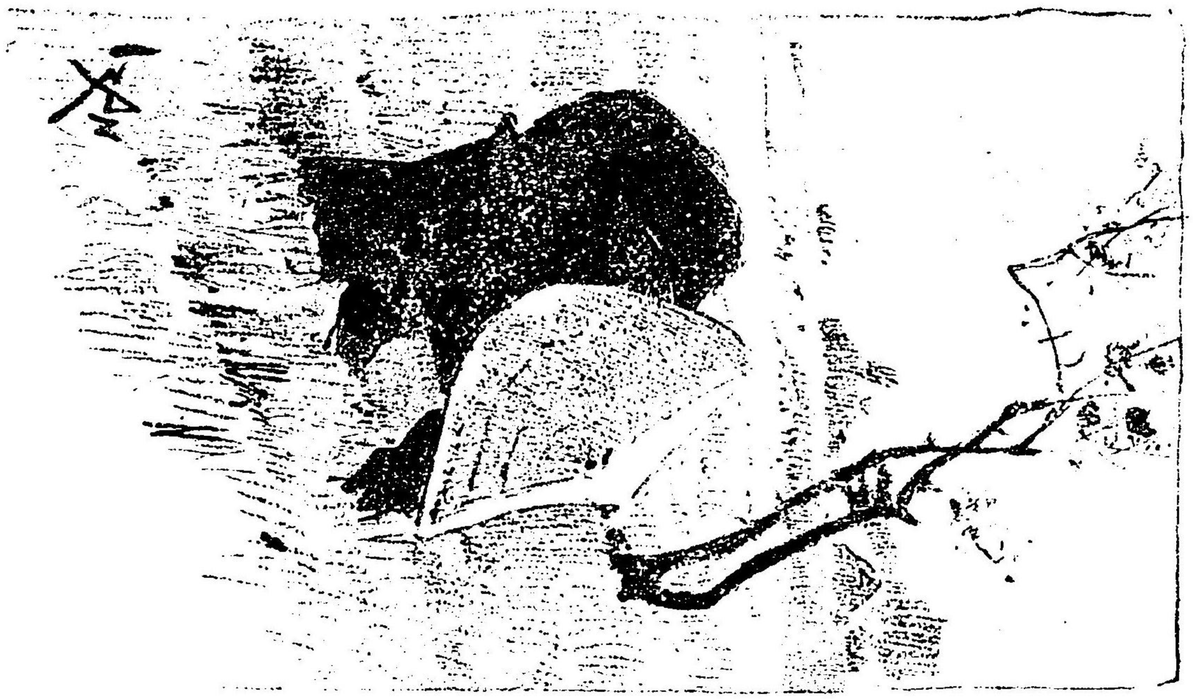
鼠……五一
喜多院……五五
冬日和……五七
照葉狂言……五八
影法師……六三
地虫穴を出る……六六
秋の山……六九
主觀的の旅……七〇
馬に乘る人……七一
天花……七三
春光秋色……七五
雛子會……七六
木枯……七八
埃……八〇
百八の鐘……八一
時候……八三
疑ひがある……八四
切……八七
初一念……八八
美人論……九一
蓋棺論……九五
或人日……九五

理窟をこねぬ人……九七
專門醫……九九
專門家……一〇〇
教育法……一〇二
面會日……一〇三
「二百十日」に「鼠」……一〇五
碧梧桐來信……一〇八
華園健在……一〇九
冬の蠅……一一
欠……一一三
器用と數奇……一一五
瀬川……一一七
めいわく……一一八
「鎌倉の記」……一二〇
能樂雜記……一二三
劍と鼓……一二五
階級に非ず……一二七
能樂會式能を觀る……一二八
能樂の新鑑賞家……一三三
能樂倶樂部別會……一三六
能樂倶樂部別會寸評……一三八
辻能……一四一

幕引に若かず……一四四
尾上松助……一四五
紙治……一四七
引窓に紙治……一四九
俠艷錄……一五〇
文藝協會の芝居……一五一
青葉會……一五五
俳人の文章……一五七
寫生文の起りしわけ……一五八
俳句と寫生文……一六〇
俳句と小說……一七一
寫生文と小說……一七六
西鶴……一八六
準備時代……一八七
感覺美……一九〇
背景を控へたる場合……一九一
寫生文四法……一九四
「埋れ木」……一九七
「にごり江」……一九八
鷗外漁史の「有樂門」……二〇〇
「おあん物語」……二〇五
天和以前の芭蕉の句……二一三

力の這入つた句……二一五
俳人のゆとり……二一七
「ももすもも」の序……二一八
組織的なる俳句論……二一九
俳句八品……二二一
蕪村忌……二二二
第二俳壇……二二五
「日本」の俳句……二二八
「日本」投句家に告ぐ……二二〇
詔諛二句……二三二
連句一片……二三三
闇三句……二三五
鶏頭三句……二三七
荻の句……二四一
唐辛子の句……二四三
團栗の句……二四五
寫生の芋と空想の南瓜……二四七
蚊の句……二四九
煙草の句……二五一
鳴子の句と鹿の句……二五三
柴漬の句……二五六

（終）



俳諧一口噺

虚子著

法隆寺

法隆寺の金堂に這入ると明るい處から急に暗い處に這入るので初めの間は何も見えぬ。漸くにして印度佛の後ろが見えて來る。(但し這入るのは横手から這入るのだ)眞四角な天蓋が見えて來る。だん〳〵と樣々な佛體が見えて來る。案内者は壁の方を向いて、此壁畫は朝鮮の僧何某が聖德太子の意を受けて書いたものだといふ。唯眞黑な壁と思つてゐたのに、成程壁畫がある筈だなと、瞳を

据ゐて暗中を見ると、暫くして纔に其らしいものが目に入る。よく見て居ると頭らしいもの、顔らしいもの、手らしいものなどがだん〳〵見えて來る。人間よりも稍大きい位に畫かれて居る佛樣が澤山あるのであつた。案内者は此彩色のうちの丹いのは珊瑚抹だといふ。彩色があるのかと更に凝視すると成程彩色がある。纔に碧い色が見える、丹い色が見える。其處許りをぢつと見て居ると、乏しい光線も自ら是のみに集まつて來るのかと思ふやうに、だん〳〵其處が明るくなつて來て、其丹碧の色はうき出るやうに目に入る。固より千年以上の歳月を經た畫だ。剝げて居る、燻つて居る、輪廓さへ明かで無い。其に拘らず其丹碧の色は鮮かに目に入る。千年の古色を呈して尙其うちに鮮明な光を湛へて居る。余は生を此世に享けて以來未だかゝる重みのある、そして鮮明な色を見た事が無い。其筈だ。珊瑚を粉にした珊瑚抹が壁土同樣惜し氣も無く磨り込んであるのだ。余は其から玉虫の厨子も見た。印度佛も正面に廻つて見た。天蓋も凝視した。一として名高くないものは無い佛體も一々見た。何れにも恍惚として目を瞶つたが、しかし此丹碧の色ほど強く心を刺撃したものは無かつた。

其から金堂を出て夢殿の廊下を通つて居る時、リン〳〵〳〵と物が鳴つた。案内者が、あの鈴は金鈴といつて黃金を澤山入れて拵へた鈴ださうですといつた。其音の善いといつたら喩へるに物が無い。此法隆寺にあるどの佛體を叩いてもあんな善い音は出さいと思つた。極樂淨土で啼くといふ伽陵頻迦の聲も恐らく斯う迄はあるまいと考へた。其から廊下を傳ふて寶藏の方へ行きかけると又リン〳〵〳〵と鳴つた。アゝ堪まらぬ善い音だと立止まつて耳を澄ました。此時ふと、今案内者は鈴だといつたが、もしか彼の金堂の壁畫の色が音を出したのではあるまいかと疑つた。

蘭の香も法隆寺には今めかし

法隆寺の鐘

これも法隆寺の話だ。山門を這入ると直ぐ右側に寫眞や、寶物の説明や、くさ〳〵のものが並べてあつて、布團を掛けた小さい猫火鉢が置いてあつて、人は居らぬ。案内者が「八さーん」と呼んだが返事が無い。鐘がゴーンと鳴る。案内者はだまつて猿臂を延ばして戸棚の横から長い鍵を出して我等の前に立つた。我等は塔を見上げ、山門を見かへりつゝ其後について行く。案内者は金堂の横の扉に鍵を突込んてコツン〳〵とこねくるがどうしても開かない。鐘がゴーン

と鳴る。案内者は鍵を突込んだまゝ鐘楼の方に行く。見ると二階立のやうになつてゐる鐘楼の下に袴とも腰衣ともつかぬやうなものを腰に纏ふた一人の男が長い綱を持つて立つて居る。我等も案内者のあとについて行く。男が綱をゆるめたと見ると鐘がゴーンと鳴る。「八さん、開けておくれ、わたしが其間撞いてるさかい」と案内者は代つて綱を持つた。寺男は默つて綱を渡して金堂の方に走つて行つた。案内者は一二三四と口のうちて撞木の搖れる數を數へて五つ目に綱をゆるめる。さうすると撞木が鐘に當る。ゴーンと鳴る。嘗て佛蘭西から日本の美術を調べに來て居た人が特に此寺の鐘を賞めてゐた事を思ひ出す。見上げると、他の寺の鐘楼とは違つて露出して居る鐘では無いから薄暗いが、細長い形をしたあまり大きく無い鐘て、青い錆が品よく古色を呈して居るのが窓から差入る光線て朧氣ながら見える。撞木が鐘に當るとゴーン、ゴーウ〳〵〳〵

〳〵と靜に遠く傳はる響きにも上代の音がある。余は堪まらなくなつて、どうか僕にも一度撞かして呉れぬかと案内者に賴んで、敎はるまゝに一二三と數をくりつゝ五つ目に大きく引いて綱を離した。撞木が當るは當つたが纔に音を發した許りで凉しい清い梵音は出なかつた。殘念に思つて今一度と數をくつて又綱をゆるめた。前よりは稍〻善い音を出したがそれでも心耳を澄ます音では無かつた。同行の把栗が、僕にも一つ撞かして呉れ、と綱を持つて撞いた。余同樣に力無い響きであつた。漸く金堂を開けた寺男は歸つて來て、「そんな撞き樣をしてはどもならん」と綱を取つて代つて撞いた。鐘の音は再び澄んだ力のある音に歸つた。

我等の撞いた鐘の音を法隆寺の村人は何と聞いたらう。田を耕しながら其力の無い音に耳を聳てゝ、佛力の俄に斯くも衰へたるかと定めて驚いた事であつたらう。併し其は唯三突きであつた。四突き目は再び元の音に戻つて天日は舊の如く明になつた。嗚呼此の靈鐘を瀆した罪は深い。併し法隆寺始つて以來佛法の泯ぶる迄此寺の鐘は何萬邊鳴るであらう、何億邊鳴るであらう。何億邊でも善い、其うちの二邊だけは余が撞いた鐘の音だと思ふと嬉しい。若し次の世に此罪深い余が萬々一にも佛の國に生れるやうな事があるならば、其は慥かに此二突きの鐘の音による事と信ずる。

此村は砧も法の響きかな

修竹林

把栗と兩人て嵯峨の天龍寺の横を散歩する。秋日和て好い氣持だ。大きな籔に傍ふて歩く。一抱へもありさうな竹が程よく間隔を取つて叢生して居る。奥が判らぬ程深い。是が名に負ふ修竹林だ。

僕の家(廢寺)には大きな佛壇がある。其處に小さい阿彌陀を一つ祭つて居る。面白いだらうと把栗が言ふ。面白いと答へる。密生した竹の葉を漏る日がちら〳〵と竹の幹にあたる。其日影が極めて鮮明だ。

僕の家に古びては居るが大きな風呂がある。其を沸した時は近所の者が這入に來る。一人が必ず一握りづゝ葉を持て來る。其をぽつと燃して暖まつて歸へるのだ。面白いぢやないかと把栗が言ふ。面白と答へる。籔の中には偶〻一本の折竹がある。他の悉く垂直の中に、其折竹の一本斜なのが極めて鮮明だ。

家の近傍に毎月一度米一升宛貰ひに來る尼がある。默つて來るから默つて渡すと持て歸る。決して一度より來ない。面白いぢやないかと把栗が言ふ。面白いと答へる。籔の中の一本の大竹に小さい蔦が絡まつてする〳〵と攀つて居る。其の眞赤に紅葉したのが眞青な竹に反映して極めて鮮明だ。

籔の中鵑啼去て聲遠し

一大發見

向うから背の低い女學生が來る。近寄つて見ると顔が何處と無く普通て無い。普通て無い筈だ鼻が無い。併しよく見ると眼鏡を掛けて居る。これは變だ。鼻が無くて眼鏡を支へ得る筈が無い。或は突出して居る頬骨て支へて居るのか知

らんと瞳を定めて見る。先づ眼鏡を見る。眼鏡の柄は滯り無く双の耳にひつかゝつて居る。其柄の續きは各ガラスを包圍して居る圓形となつて、其左右の圓形は一の線によつて連絡されて、其連絡線は正に顏面の中央に位して居る。性根を据ゑて見詰めた眼が此の連絡線の上に落ちた時余は一大發見をした。其は鼻が無いと思つたのは誤りて、慥に筋肉の一隆起を認め得た事だ。さうして此一隆起が大方鼻であらうと認定し得た事だ。勢よく突出した兩頰骨、てか〳〵とむけ上つた額、厚ぼつたく反りかへつた上唇、此四つの丘で圍はれて居る中央は極めて平坦で一寸見たゞけでは殆ど何物をも認める事が出來無かつたが今眼鏡の連絡線のお蔭で纔に鼻らしき一隆起を認め得たのである。是は頗る平板を破つて頓に顏面に一生氣を附與した感がする。而も尙諦視して居ると、其微かなる隆起の上に相並んだ二つの穴がある。さうして其穴のあたりは何となく物の

動く氣がしてたゞならぬ有樣だ。即ち二つの穴は鼻孔で、其鼻孔は十人並に呼吸を司つて居る事を續いて認識した。唯不審なのは、普通鼻孔は顏面全體からいつたら稍中央より下部に位せなければならぬ筈だのに是は中央以上に位して居る事だ。さうして彼女が余の顏を見上げた時眼鏡は殆ど天上を見て、丁度其二つの鼻孔が余の顏を見詰めた事だ。余は鼻の穴に睨まれたのは正に此時を以て初めとする。其はよいとして、朝夕其鼻の上に乘つかつてゐる眼鏡は定めて一方ならぬ苦勞であらう。油斷をしたらすぐ踏み外して頰骨の上にぶら下らねばならぬ。其處をぢつと踏みこたへて居る眼鏡には定めて種々の苦心談があらう。

梶の葉にやさしき歌のありや無し

勘公

喜多床に行く。勘公が剃つて呉れる。勘公は長大な軀幹をかゞみ加減にして大きな手に小さい剃刀を無器用に持つて剃る。此前來た時此頃背中に割青を始めた、といつて大變得意で居た。もう出來上つたかと聞く。先づ一通り出來上つた、といふ。何を彫つた、花鳥か人物かと聞く。

櫻を彫りました。ところで旦那に聞いて見やうと思つてたところだが、梅に鶯つてえやうなわけに、櫻にはどんな鳥をとまらしたものかね。

といふ。さうだねえ、と余は少々困る。傍に剃つてゐる久公、

梅に鶯柳に燕……成程櫻には何も無いね。矢張り鶯か燕のうちにしときねえ。

さうも思つたが、人に笑はれねえやうに一番旦那に伺つて見てえと來るのを待つてゐました。

と甚だ熱心だ。余はいろ〳〵考へる。櫻に配合して最も調和のよい鳥は何だらう。雉子はどうかな。櫻に雉子は形からいつても色からいつても善い配合では無い。雲雀はどうかな。歸雁はどうかな。いづれも面白くない。歳時記の春の鳥を心のうちで繰つて見るが何も無い。鳥交る、鳥雲に入る、などは固より問題にならぬ。雀子はどうだらう。雀子が櫻にどうして居る處にするか、配合のしやうがあるまい。愈〻困る。何か櫻に鳥を配合した俳句はあるまいか。

櫻　咲　く　頃　鳥　足　二　本　馬　四　本　鬼　貫

といふ奇な句が一番に浮ぶ。しかしこれでは何にもならん。其他何か無からう

か。蕪村には無からうか、思ひ出せぬ。其他古人の句を考へるが皆目出て來ぬ。近頃の句にはどうであらう。これも思ひつかぬ。ふと自分の句であつたか人の句であつたか其れも忘れたが、朝早く花の中から露に濡れた鴉が飛び出るといふやうな句があつた事を思ひ出す。鴉々、鴉はよい配合だ。色からいつても面白い。

どうも困つたが一つ思ひ附いた。

勘公も久公も手を留めて余の顔を見る。

何だね、鴉は……

と余は稍〻得意になつて勘公の顔を見ると、傍から久公がブブーと噴き出す。一間置いて隣の親方もハヽハーと大聲を出して笑ふ。

鴉はよく出來ましたね。鴉の勘公は面白い。

といふ。余は始めて氣が附く。勘公は

戯談いつちやいけねえ。

と人の善さゝうな顔を赤くして笑て居る。

これは六七年前の話だ。神田から麹町に引越して以來喜多床には一度も行かなかつたが、此間店先きを通つた序に久公に聞いて見たら勘公は泥棒をして捕まつたさうだ。

ひもじさにものを盗む秋の烏かな

十二社雜記

十二

（一）

十二社の松の木にか、つて居るペンキ塗の茶屋の看板が見え初める處に一軒の百姓家がある。百姓家かと思ふと前に車が置いてある。親爺は百姓をする傍ら車をひくと見える。其百姓家の前を過ぎると、其並びに十坪許りの草原がある。其前に一人の印袢纏が向うを向いて立つて居る。背が馬鹿に低い。股引を穿いた脚が一尺程しか無い。腰も曲つて居る。よく見ると頭が變だ。髷がある。髷もチョン髷よりは少し大きい。拳固程ある。近づいて見ると小さい丸髷だ。驚いた六十許りの婆さんであつた。右の手に大きな鎌を持つて居る。さうしてぼかんと草原を眺めて居る。これから婆さん此大鎌につられながら此草原の草を刈る氣と見える。草原には夢に似て非なる草が亭々と聳え立つて他の群小を壓して居る。

鎌の齒を石にとぼすな白露に

（二）

十二社のある茶亭の座敷を借りて二三子と芋虫といふ題で十句を作る。下女が茶を入れかへに來る。姉さん此邊に芋虫がゐるかいと聞く。芋虫ですかと客の顔を見て、居りますといふ。大きいかい小さいかいと聞く。さうですねえ此位なのが居ります、と指で寸法を拵へて見せる。一寸障るとくる〳〵と丸くなるねえと聞く。おゝこはい、と下女は首をすくめる。何故こはいのかいと聞く。此間此村の馬鹿が芋虫を三匹、知らぬ間にわたしの寢床の中に入れていつた、翌朝起きると朋輩がお爪さん財布が落ちてゐるよといつたので、さうかいと拾ふて見たら芋虫が丸くなつてゐたので氣絶する程びつくりした、今考へてもぞつとするといつた。皆ハヽヽヽ笑つた。余も笑つたが、何故芋虫を財布と間違へたかがわからなかつた。其後いろ〳〵考へて見るがどうしてもまだわからん。

秋の風わからぬ顔を吹きにけり

（三）

十二社の森にも池にも暮色が見え初めた。大きな銀杏を隔てゝ向うの二階に一組の客がある。今日の客は余等の外は此一組の客許りだ。もう其も歸り仕度をして居る。十七八の娘がもう仕度が出來たと見えて手摺の處の柱に背を靠して仲間の仕度をするのを見ながら待つて居る。其内に暮色が段々迫つて來て其二階のうちなどは薄暗くなつた。娘の著物の縞柄もはつきりわからん。唯其帶だけが眞赤に見える。繻珍でもあらう光りのある眞赤なのを幅廣くお太鼓に結んだのが此十二社の天地に唯一つの赤いものとして强大な力を持つて居る。森も青い、池も蒼い、遠方に見える百日紅も薄靄に隱れて居る。唯夕暮の明りが此處許りに集まつてゐるのかと思はれるやうに、軒淺く柱に靠れて居る其帶ばかりが光りを保つて居る。娘の横顔も唯白粉が白く見える許りて目鼻立は少しもわからん。併しながら此眞赤な、十二社の天地を支配する帶の主として、定めて世に類ひ無き美人て而も崇高な女神のやうな顔立ちであらうと想像する。日はます〳〵暮れう〳〵と軒端まて迫つて來る。けれども此帶がぢつとして動かぬので其邊にまごついて居る。

其内仲間の仕度が出來たのであらう娘は終に柱を離れた。帶は消えた。闇は屋根から落ちて來た。人形芝居の舞臺が變るやうにばた〳〵と暮れた。

好色者と鳳仙花にうたはれん

三階

松山に何某の厄さんといふ人があつた。父なる人の厄年に生れたので厄之助といふ名をつけたのださうな。明治の初めから士族の商法をはじめて初めは牛肉屋から中頃は料理屋になつて一時は素張らしい勢であつた。泳ぎが上手で撃劍が達者でじやんこ面でしやがれ聲で、其て余等が遊びに行くと、清坊來たかい、裏へ行てお見、犬が子を産んだ、と何となくなつかしい叔父さんであつた。併し其素張らしい勢は永く續かなかつた。料理屋を止めてもとの牛肉屋に戻つた。其牛肉屋も以前の十分一程の小規模のものであつた。四十過ぎて脚の立た無い病氣になつた。それても其しやがれ聲は昔のやうに底力があつて快活であつたが程なく死んでしまつた。妻子は離散した。今は厄さんの盛時を知るものも少なからう。

松山の大街道に三階がある。これは二十年餘り前からある。今でも松山に三階は此一軒しか無い。二十年前に比べると平屋は減つて二階ば殖えた。併し三階は今でも此一軒しか無い。厄さんの盛時を最もよく知るものは此三階だ。厄さんは失敗したが三階を殘した。厄さんのやうな人が無かつたら松山に三階はまだ無い譯だ。

三階も平屋も秋の人住めり

中秋無月

中秋無月だ。此の夜川崎氏と小川氏とが見えた。小川氏と余とは川崎氏に就て大皷を習ふのである。小川氏は斑女の「秋風は吹けども。荻の葉の。そよとのたよりも聞かで。鹿の音虫の音も。」の處を手拍子てやつて見て、わからぬやうな顔て手附けを覗き込む。ランプが若白髪の斑白の髪と赭い顔を照らす。余も燈下に顔を突出して其手附けを見る。此時何とは無く斯ういふ考を起こす。斯ういふ事は嘗て余の父もした事があらう。今夜の樣に朋友と共に大皷の一手を覺ゆるのに苦心して、其を覺えるのを又無上の快樂と感じたこともあつたらう。併し其父はもう死んで居る。父のみでは無い祖父も亦斯る事をした宵があつたらう。其祖父も固より死んで居る。其死んだ祖父や父が今夜のやうな事をしたかと思ふと何となく淋しい。自分の背後にも死といふものが控へてゐる事を意識する。余は死ぬるのだな、と思ふ。坐ろに淋しい。ぢつと手附けを見る。ヌクツヾケに打ハナシにコシてヌク打カケを打つて二ダンメを打つやうに書いてある。目は手附けを見て居るが耳には軒の雨垂れの音が這入る。或所ては靜かに潦に落る玉垂れの音がする。或所ては世話しく板をうつ點滴の聲が聞こえる。更に耳をすますと雨は小止みも無く降つて居る。再び今皷を習つて居る余は死ぬるのだな、と思ふ。死んで余の死骸は山野に葬られて今夜のやうな雨に曝されるのだなと思ふ。今屋根の下に燈下に坐して大皷の手附けを見て居るのが不思議なやうに思ふ。小川氏はいつかわかつた顔で皷を取り上げて居る。川崎氏は張り扇を握つて拍子盤に向つて居る。此時どうしたわけか神田の支那料理屋の表に中秋月餅と赤い紙に張り出してあつたのが目に見える。

芋食ふて皷うつなり日本人

「清水」の面

床屋で髭を剃らして歸つた翌日から顔が一面に腫れて痒い。鏡を見て顔をしかめて見ると狂言の「清水」の鬼の面に似て居る。醫者に見せると、皮膚病が傳染したのだらうといふ。

友人が來ての話に藤原信實の繪卷物に斯ういふのがあるといふ。はじめ開けて見ても何も無い、少しあけて行くと白紙の上に胡粉の點が二つ三つある。開けて行くに從つて其點が殖える、其は雪にしたものだ。だん〳〵開けて行くとだん〳〵殖える。暫くの間さういふ事があつて、しまひには滿紙一面の大雪だ。さうして最後には深雪の中に埋まつて居る小家の圖がある。それでおしまひになつて居るさうだ。繪卷物を最もよく活用した趣向だと感心する。

顔のほてるのと痒いのとを忘れてゐたが、鏡を見ると元の通り「清水」の面が映る。

秋晴の顔になり度き願ひかな

防風

置火燵に足のさきだけくべて古い昔の回想に耽ける。余は六歳程の小兒である。七十餘歳の祖母に手を引かれて、折節鄕居をしてゐた風早郡の別府村の家から土手傳ひに二三町歩いて海濱に出て、浪の打つのを心地よく暫く眺めて、

防風

二人で眞白な砂の中に生えて居る防風を拔く。防風は青い葉をしてゐて、白い莖をしてゐて、砂に這入つてゐる部分はほんのりと赤い色をしてゐて、子供心にも潔い美しい草だと常に思ふのであつた。祖母は老いた手に其防風を握つて居る。余も幼い手に亦防風を握つて居る。二人とも防風の根の赤い處に目を留めて居る。さうすると海原がどことなく夕燒けて大きな白帆がすぐ二人の傍近く通る。

脚に出來た瘍を昨日切り取つた其あとが痒い。今朝洗ふ時見たら一錢銅貨程の肉が丸くゑぐり取つてあつた。

切る時は此上なく痛かつたがもう忘れてしまつた。今日「ほとゝぎす」一月分の編輯がすんだ。ぢつと防風の赤い處を見つめて居ると大きな白帆がすぐ傍を通る。

火燵近く大きな白帆過ぎにけり

夢

斯ういふ夢を見たといつてよこした人がある。

大きな公園の廣場の樣な所で小學校の生徒が數千人自分を中に取卷てくる〳〵まはつたのと。

美しい女が少し薄暗い室で帶を結んで居る、著物は濃紫で帶は錦である。前に金地の扇が寒い朧な光を見せて開きかけてある。女は帶をくる〳〵幾重にも卷きつけて居るが、いくら卷いても端が來ない。端は來ないが、不思議らし

夢

い顔もせずくる〳〵と巻て居るのと。

兩方共面白い夢だ。余もゆふべ劣けないやうな詩的なやつを見やうと思つて寢たが、一夢なして今朝九時頃まで寢た。夢どころか夜中に一度起きて小便をさしてやるのが余の役目になつて居る男の子に小便をさすのも忘れて寢た。

布團が冬の日南に乾されて居る。其染の形が馬に似て居る。妙な形の馬だ。神仙體の馬だ。何やらこんな馬に一度出遇つたやうな心地がする。馬には出遇はなかつたかも知れぬが、今此馬を見た時のやうな心持を曾て一度起こした事はあるやうに思はれる。生れぬさきの前世の記憶か、それとも見たとは覺えて、まことは見たよべの夢か。

夢をもて現につぐや日短か

新海非風

今日電車に乘つてゐて、ふと新海非風の事を思ひ出した。非風の事を思ひ出すと嵐山の戻りの藪の中の大きな螢を思ひ出す。非風と細君と余と碧梧桐の四人連であつたと思ふ。嵐山へ遊びに行つて三軒屋で御馳走を食つて夜遅く京都へ歸つて來た。途中廣澤の池近傍であつたか、ふと竹藪の中を見ると大きな螢が光つて居た。藪から外へ枝垂れて居た一本の笹にも二三匹居た。其大きさといつたらまるで提灯のやうであつた。月も無い淋しい夜道に突然この螢に逢著して其光りの目だゝしく大きかつたのが深く〳〵腦裏に印象された。同時に其螢を取らうとして背の高くない細君が延び上るやうにして團扇で打たうとしたが屆

かなかつた。其をフラフ竿のやうに背の高かつた非風が細君の團扇を受取つて打つたら笹にゐた二三匹の螢が皆一時に飛んだことも今に記憶に留まつて居る。碧梧桐は其螢の一匹を追ふた。余は他の一匹を追ふた。併しいづれも高く〳〵飛んで一匹も取れなかつた。其夜の螢は大きい美しい光りの螢であつたが其夜の闇も大きい美しい心持ちのよい闇であつた。

其時分の非風は戀に滿足して文學を忘れかけてゐた。碧梧桐と余は學校の課業に追はれて蜜のやうな花のやうな文學趣味にあこがれてゐた。其時分の細君の心持だけは當時でもわからなんだが今でも一寸余には想像がつかぬ。

非風は死んでからもう六七年になる。細君はどうしてゐるか更に起居を審にせぬ。碧梧桐は今旅行してゐる。余は今電車に乘つてゐる。と此處まで考へて氣がつくと電車は丁度新見附に著いた。電車を降りる。馬鹿に寒い。非風が北海道へ行く時余が一枚の胴着を脱いでやつた事を思ひ出す。これは螢よりは一二年後の事で非風が最も窮迫してゐた時分の事だ。非風の回想は多く悲慘だ。唯ぱつと目の前に出る廣澤の闇と螢は直ちに愉快なる舞臺の背景となつて、其主人公としての登場者たる非風の顏には一點の曇りも無い。

古白には螢さへ無き寒さかな

氷

或朝余は手水鉢の氷を杓ですくひ上げて庭に擲つた。翌朝見ても瀬戸物の破片の如く散亂した氷は其まゝ解けずに居る。翌々朝であつたか余の長男は新たら

しく張つた手水鉢の氷をいたづらしてゐた。早くせぬと幼稚園の時間に後れると家人の叱る聲が聞こえた。其後手水に行く序に見ると、さきに余の庭に擲つた氷の破片に接續して新たらしく他の氷の破片が散らばつてゐた。大方今朝長男がいたづら序に庭に擲つたものであらう。長男と余とは生命に於て接續して居る。さうして庭に擲つた氷の破片に於ても接續して居る。

人生は同じく溶くる氷かな

富士の頂上

四五年前の夏富士山に登つた時の事を思ひ出す。非常に天氣の好い靜かな日であつた。二合半まで馬でいつて其から歩き出した。余は大事を取つて急がずあせらず登つた。初め景氣のよかつた同行者に五合目六合目あたりで追越した。七合目八合目あたりで追越した。遙に上を見上げて見ると二人許り先登者がある。後を見下すと稍ゝ後れて居るもの、遙に後れて居るもの、隨分澤山の人が居る。余は獨り胸突八町にかゝつた。五六合目あたりて息を切らしてゐたものもあつたが余は平氣であつた。然るに胸突八町にかゝつたら勾配の急な上にだん〳〵空氣も稀薄になつて來た爲であらう、頻りに息が切れる。餘り苦しいので休む。休むとすぐ恢復するので又歩く。五六間行くと又切れる。又休む。斯ういふ風にして遲々として登つて居ると俄に風が吹いて來た。或岩角をまがつたので或は風筋に出たのかとも疑つて見たが、さうては無つた、急に天氣が變つて來たのであつた。見上ると千尺の屏風を立連ねた如き屏風岩の上から瀧のやうに霧

を吹下して來る。非常な壯觀だ。一つの石に背を凭せて風を避ける。今迄は二合目からまだづうつと下の裾野迄一目に見渡された晴れ〳〵とした廣大無邊の景色であつたのに其がすつかり霧に鎖されてしまつてゐる。驚ろいて四邊を見まはすと左手も右手も大きな岩の肩近く聳えて居るのが見える許りで、其間を霧が急流の如く流れて居る。今迄は先登者とも後れ登る者とも連絡が取れてゐて、御殿場の宿屋と富士の頂上との間には、地と天とを繋ぐ長い〳〵梯子が掛けられて、其梯子を一目て見通してゐたやうに思つてゐたに、忽ち前後が中斷されて余は今濁世から拔き取られて頂上近い海拔何千尺かの處に天柱石門の中に獨り佇んて飽くまで霧を浴びてゐるかの如く覺えた。寒さが五體に浸み渡る。頭の尖から足の尖迄一點の塵氣を留めぬ。霧の中から雨が降つて來た。其雨は眞白で冷めたかつた。其雨は余の透明な體を突透して降るやうに覺えた。余の

體がガラスの中に垂らした水晶の簾でもあるかのやうに感じた。暫く一所に佇んて岩と霧と雨とを眺めてゐた。雨が大粒になつて霧が薄くなつた。今迄殆ど見えなかつた屏風岩が又そろ〳〵見え出した。天氣は再び急變してまた〻く内に霧が晴れた。雨も止んだ。御殿場と頂上との間には又地と天とを繋ぐ長い〳〵梯子が掛けられた。余は梯子の天邊を攀ぢて、屏風岩の下を迂回して、銀明水を飲んて、其夜は頂上に寢た。

「元日や神代の事も思はるゝ」とか「元日の見るものにせん富士の山」とかいふ句もあるが、天地の分れし時ゆ神さびた御山の頂上近い處て、獨り神仙體になつた此時の感じは全く神代以上てあつた。

福壽草裾野の草てありぬべし

修善寺紀行

芝浦で二三十艘の貸船がづらりつと並べて繫いであつて、其いづれもの船梁の中央に二尺餘りの同じやうな松が悉く立つて居たのは綺麗であつた。

箱根のトンネルの中に這入るとガラスの外は眞暗だ。外のものは勿論見えぬ。中のものも何も映つて居らぬ。唯其中に一つ白いものが映つて居る。何であらうかとよく見ると七つ許りの洋裝の女の子の胸掛けの白いのであつた。尙よく見ると頭にかゝつて居る赤いリボンも殷紅色になつて暗やみの中に朧氣ながら見える。此女の子は新橋を出る時から眼についてゐた品格のよい靜かな子で、父なる人も素朴な品性の賤しくなささうな風采である。父と二人何處かの溫泉

にでも行くのであらう。他の乘客の多くは俗惡な胸の惡いもの許りの中に此親子連れは鷄群の一鶴とも見るべきであつた。其の愛すべき女の子の純白な胸掛けと深紅なリボンがガラスを通して箱根のトンネルの闇の中に映つて見えたのだ。

御殿場あたりの富士は一點の曇りも無く晴れ切つてゐた。御殿場を過ぐると少し雲の帶が見えそめた。其も富士の手前では無く向う側に棚引いて居る。佐野近くなつた時分其黑ずんだ雲の帶の中にまだらな赤い色を認めた。見る〳〵其赤い色は色を增し光りを增して雲の帶全體が深紅に染まつてしまつた。其赤い色も東京などで見るとは違つて紫がゝつた派手な色で、油畫でも見た事の無い色だ。桑の實の熟し切つたのをつぶして一萬燭光で輝かしたとでもいふやうな色だ。此の美しい派手な大火事の火元は愛鷹山の左肩の處だ。其處が光の中心

でだん〳〵薄らぎながら右に棚引いて富士の高峰の後ろあたりて消えて居る。車中の人は皆美しいといつて見た。其めい〳〵の顔が皆どこやら桑の實光を放つて居るのもをかしい。余の愛する彼の端正な少女の顔も純白な胸掛けも桑の實光を帶びて居る。

豆相鐵道に乘り替へると、車中がランプ一つて薄暗く、急に旅らしくなつた。七年程前に乘つた馬車がなつかしくて大仁から乘る。多くの紳士は皆な人力車に乘る。馬車が紳士を乘り越して一番に修善寺に入る。新井の主人は舊知で、主婦は山妻と同窓だ。自分ところへ歸つたやうだ。部屋に通つて茶を飲んで原稿をこゝまで書いた時紳士連の人力車がごろ〳〵と表に止る。馬車萬歲。(一月一日午後七時四十分)

大磯所見

遣羽子を浪に落すなと眺めけり

五六本の松

後ろの山に五六本老木の松が聳え立つて居る。外は兀山といふては無いが皆な若木許りて高い木が無いので此五六本の松が目立つて高く見える。今日は寒いがそれても天氣は穩かだ。此五六本の松の上に寒い雲が流れて居るがそれても雨も降ねば風も吹ぬ。以前此宿に滯留してゐた時は夏の初めてあつた。ソレ天氣が變だと思ふとすぐ黒雲が軒近くさまよふ。山々は皆雲に包まれて僅に此五六本の松が其黒雲の間に見える。忽ち神鳴りが鳴る、クワッと光つたと思ふと

屋をゆるがすやうなのが鳴りはためく、心細いので酒を飲みながら稲妻とにらめつくらをする、これが其時分の毎日の日課であつた。

其時分と違つて今日は寒い、曇つてゐても穏かで神鳴りどころか雨さへも降らぬ。ぢつと五六本の松を見て居ると其七八年前の昔が戀しい。

新井屋庭前即景

遣羽子の二人隱くるゝ大木かな

桂川

馬車が修善寺村に這入つた時桂川の水音が耳につく。新居屋の三階に居を占めて煙草を一服吸ふた時桂川の水音が耳につく。菖蒲の湯に這入つて手拭でゆるやかに顔を洗ふた時桂川の水音が耳につく。森本、小坂氏等と皷をあぶつた時桂川の水音が耳につく。末弘氏等と朝長を謠つた時桂川の水音が耳につく。朝日がくわと障子に當つた時桂川の水音が耳につく。女中の影法師が障子の外を過ぎ去つた時桂川の水音が耳につく。襖の孔雀の畫に鐵瓶の湯氣が棚引いた時桂川の水音が耳につく。募集句を見倦きた時桂川の水音が耳につく。溫泉の暖みを惜しみて衾にくるまつた時桂川の水音が耳につく。夜中に枕のかたいのに氣がついた時桂川の水音が耳につく。殊に曉方ほの〴〵と靜かな夢が覺めて、雨戸の透間から僅に白い光が差し込んで居るのを見た時は屋を撼がす桂川の水音が耳につく。殊に又其水音の中に一聲二聲鷄の聲が交るのを聞いた時は身は三階どころか尙高い〳〵處に寢てゐて、遙に〳〵下の谷川の水音と川のほとり

の小村に鳴く鶏の聲が夢の名殘りを訪づるゝのかと疑はれる。更に又下女が來て雨戸を一枚繰つた時、後ろの山の巓に曉の明星が爛々として炬の如く輝いて居るのを見た時は、天にも羨けと鳴り響いて居る桂川の水音が耳につく。斯くて御者が一鞭をくれて、六人乘りの田舍馬車が此村を出る時迄、桂川の水音は常に〳〵我耳許を去らぬのである。

新井屋即景

松立てる門を這入るや鶏提げて

白雲

今回は川崎氏も同行の筈であつたが、出立の前夜から惡性の風邪に冒されて同氏は一行に漏れた、同宿の末弘氏は旅中惡性の風邪に冒されてまだ熱があるのを五日の朝出立して歸京された。其他浴槽の中でも、廊下の立話しでも「惡性の風邪」「惡性の風邪」と何かにつけて繰り返されて居る。此聲は舊年から聞いてゐた。現に余の家族のうちにもこれに冒されたものが二三人あつた。現に余の一兒はこれに冒されつゝあつたのを後にして余は立出した。さうして五日の朝末弘氏の馬車を送つた余は五日の午後同じく馬車に乘つて修善寺を見棄てねばならぬことになつた。「惡性の風邪」は余の家族に對して益〻猛威を逞くして、歸京を促す電報を受取つたのである。

三島で一時間餘り接續の汽車を待合はす。退屈だ。大きな欠びをして、欠びの終りに節をつけて見たりする。嚔をする。嚔の尻を長く引いて見たりする。目

の前は畑だ。畑の彼方は松原だ。松原の彼方は愛鷹山だ。愛鷹山の彼方は富士の山だ。愛鷹山は黑い。富士山は白い。富士山は四日前に見た時よりは著しく白くなつて居る。其も頂上よりは却て中腹の方が白い。頂上は殆ど一直線を爲して居る。其一直線の中にも多少ギザ〳〵があつて左方の外れが一番高い。そこが劍が峰であらうと思ふ。退屈だ。

退屈だなアと思ふてふと氣がつくと愛鷹山と富士山の間から白雲がすこし湧き出る。又退屈だなアと思ふと又すこし湧き出る。よく見て居ると、余が退屈だと思ふ度び〳〵に白雲は湧いて出るらしい。さうすると愛鷹山の右肩から富士の中腹に湧く白雲は余の退屈が具體された事になる。斯う氣がつくと愉快だ。退屈だなアーと思ふて見る。白雲がヅーッと湧く。退屈だッと思ふて見る。白雲がヅッと湧く。

斯くて停車場の柵に顎をのせて退屈だ〳〵を繰りかへして居ると白雲は終に富士の中腹を包んでしまつた。余の退屈の分量は實に富士の中腹を包んだ白雲に相當する。然り余の退屈が富士の中腹を包んでしまつた時汽笛の音が聞こえた。漸く接續の上り列車が來たのである。

修善寺村外即景

畑中に門松立てし何の爲め

富士の夕日

富士山に夕日が當つてゐる景色は壯大だ。五日佐野で見た夕燒雲は一日の夕方

の艶つぽい紫雲では無かつた。愛鷹山の向うには薄赤く雲が燒けて居る。其雲の形なり色なりが大砲を打つたあとの砲煙を想像せしめる。即ち愛鷹山の頂上の巨砲は今しも火蓋を切つた處で、其砲口の薄赤い砲煙が渦卷て居るといふ景色だ。其砲口の眞正面に當る處は何處かと見ると丁度富士山の中腹らしい。扨て富士山はどうかといふと、恰も日の下開山の横綱が胸を開いて小角力のぶつかつて來るのを待つてゐるやうに、豁然と廣大なる斜面を開け廣げて其砲丸を受けてゐるかの觀がある。而も愛鷹山頂の砲口より打ち出す砲丸は黑い丸い丸では無い、明るい放散した光りだ。夕日だ、即ち夕日は富士の斜面に寸翳なく當つて居る。頂上から愛鷹山の右肩に隱れて居る左りの裾迄、其弓なりに傾いた斜面には何の遮ぎるものも無き明白な光線が當つて居る。雪の白いところは凹入したる谷、雪の無いところは突出したる丘、其谷と丘とがくつきりと見

わけがつく。多くは縱に刷毛の痕を殘した雪の中に、椀のやうな形をした特別の雪があるのは寶永山の噴火口をめぐれるもので、其寶永山の斜面上に突出して居る樣も、手に取るやうに認められる。平生は厨子の奥深く御目口鼻ありとのみ拜んでゐた秘佛に蠟燭をさしつけて見て、白く丸い頰、隆々と高い鼻、赤い唇等を明白に認め得た時と同じ感じだ。

秘佛の面に蠟燭をさしつけたのは人工の小の小だ。富士の斜面に夕日の當つたのは天斧の大の大だ。愛鷹山の上の薄赤い砲煙は見るうちに形を替へる。富士の斜面はいつまでも靜かに夕日を受けて居る。若し其處へ一羽の鶴が飛ぶか一片の白雲が來去したならば其だけの影を富士山の上に落さねばならぬ筈だ。併し其處に一羽の鶴も飛ばぬ、彼の薄赤い砲煙の外には一片の白雲の去來をも認めぬ。唯砲煙は同じ處に居て形を變へて居る。富士の斜面は豁然と其胸を廣げ

て靜かに夕日を受けて居る。

草庵即事

松除ける事も忘れて八日かな

車中

御殿場に汽車が著くと車外が非常に騷々しい。どうしたのかと思ふと忽ち戸を開けて何十人かの人が車中に闖入して來る。多くは鳥打帽を被つて洋服を着て居る。中には電車の車掌のやうな白い筋の這入つた帽子を被つてゐるのもある。何れも醉つて居る。雜然として口々にしやべつて居る。其中に黃色い鋭い聲が

交つて居る。女の聲だ。見ると藝者だ。多くは藝の立ちかけて居る方だが、中にはまだもの赤い雛鳥のお酌らしいのも居る。即ち何十人かの一連は其妻籠めに我等の客車に鯨波を上げて闖入して來たのである。今迄乘つてゐた車中の一同は目を側だてゝ之を見た。併し此少數の側目者はまたゝくうちに闖入軍に包圍されてしまつて、有るのか無いのかわからぬことになつてしまつた。今迄見えてゐた女教師らしい人は見えなくなつてしまつた。藝者の島田が群を拔いて彼方に聳えて居る。今迄見えてゐた水兵は見えなくなつてしまつた。畑德利を口にあてゝ立飲みして居る一人の鳥打帽がよろめき乍ら突立つて居る。毛布を被つてゐた婆さんは見えなくなつてしまつた。老人の癖に齒並みのよい男が折詰の中から何やらつまみ出して口に入れうとして居る。誰の手かわからぬが太皷の撥をふりまはして居るのがある。「そんなに下から持上げてはいやよー」と

いふ猥褻な聲が聞こえる。

漸く汽車が動き出したので轆轤の音に紛れて其騒ぎが耳に這入らなくなつた。同時に室内は其數十人が一時に燻べた煙草の煙で濛々と打煙つて居る。ぢつと目を眠つて居ると、蕭然たる汽車の響きの中に時々甲高い破格な音が火花の如くに交つて聞こえる。藝者どもの聲であらう。何をふざけてゐるのかわからぬが何やら目の前で劍槍相交るといつたやうな大混雜が始まつてゐるらしい氣がする。が、目を開けて見るとさうでも無い。汽車は今蕭々とトンネルの中を過ぎ行きつゝある。一連の闖入組は稍ゝ騒ぎ草臥れて煙草の煙の中に長い顔幅廣い顔を高低參差として漠然と並べ立てゝ居る迄だ。

彼等一連は小山と山北で皆下車してしまつた。藝者もお酌も下りてしまつた。富士紡績の新年會でゞもあつたらしい。彼等の下車したあとを見ると舊の如く女教師が居る、水兵が居る、毛布を被つた婆さんが居る。煙草の煙りも同時に退散して御殿場以前の靜肅な客車に戻つた。女教師が「マア八釜しかつた」と舌打をすると、水兵は「ハ、ハ、ハ、ハ、」と愉快さうに笑ひ、婆さんは「ホ、ホ、ホ、」と可笑しくも無い顔をして相槌を打つた。

佐野停車場所見

富士山の雪に當たりし冬日かな

鼠

余の家は名村氏の所有に相違無い。併し其借家人は果して余等の家族であるか

又鼠であるかは大いなる疑問である。昨夜差しせまつた用事で夜更かしをした。家人は已に寢靜まつた。病中の下婢も寢入つたらしい。病後の子供も熟睡して居る。其に臺所で大いなる物音をさすものがある。其は鼠である。あまり激烈なので行つて見ると米磨桶に磨ぎすました米の入れてあるのを襲ふて居るらしい。其上に被せてある蓋を二寸許りいぢらして居る。乃ち棚の上より擂鉢を取り下して其蓋の上にかぶせる。漸く歸つて座に著くや否や、又他の物音が始まる。今度は紙屑籠か何かをひつくりかへしたらしい。何でも新聞紙らしいものを搔き亂らしていたづらをして居る。腹が立つが面倒臭いのでほうつて置く。其内憂然として何物をか墜落さしたらしい。此物音に先生自身で驚いて臺所の障子を驅け上つたかと思ふと、もう天井に三四匹の老鼠が驅け廻る音に變つて居る。其も唯驅け廻るのならよいが、屋を撼がす程の大騒ぎて釣りランプが其爲

めに時計の振子の如く振動する。糞が十許り天井板の隙間から落ちる。甚だしきに至つては俄かに點滴の音が聞こえて机の上に黃色い雨を降らす。大喝してやり度いが、さうすると子供等が目を覺ます恐れがあるので天井を睨めた儘で辛抱して居る。さなきだに其物音で一番下の兒が眼を覺まして鼻の詰つた聲をしてフギャー〳〵と泣く。鼠先生は反應のあつたのに凱歌を奏して更に隅から隅へとかけずり廻る。第二軍が再び臺所で皿廻しの藝當を始めたらしい。

余は此家の住人ては無いか、大枚の借家料を拂つて賃借りして居る次第ては無いか。其れに何ぞや、一文の借賃をも拂ふわけて無く、無斷で天井裏を借用して置きながら、臺所を荒し廻り、天井を驅けずり廻り、傍若無人の振舞をするといふのは斷じて許し難き所行である。明日は早速毒藥を買つて來て汝の一族を塵殺してやるからさう思へ。若し旨く遁れまはつて尙我借家權を侵害する

に於ては、家主に談判して借家賃の半ばを汝に負擔さすからさう覺悟するがよい。とても此儘では濟まされぬと腹が立つ。暫く仕事に氣を取られて居ると時計が二時をうつ。バラ〳〵と音がしたのは今度は氣持ちのよい霰の音だ。非常に寒さが增したと思ふたら霰が降つて來たと見える。

ふと氣がつくと鼠の音が聞こえぬ。先生も草臥れて寢たかなと思ふ。草木も眠る丑三つ頃といふから先生も寢なければならぬとと心得て寢たのかも知れぬ。今朝日高く起きると頭が痛い。昨夜憂然として墜落したのは余の飯喰茶碗であつて、眞二つに割れてゐるとの事だ。愈〻以て勘忍ならぬ。毒藥調合か、家賃談判か早速其一つに取りかゝらねばならぬ。

夜半即事

ストーブの燃ゆる音高く霰かな

喜多院

此頃或人が來て川越の喜多院といふ寺に就て話しをした中に面白い一節があつた。此喜多院といふ寺は潘公の菩提所であつて殊に天台宗中有名の古刹であつて、境內も非常に廣かつたのが維新後一時甚だしく荒廢した。其荒廢當時此境內は子供の遊び場所になつてゐた。惡太郎どもが集まつて來ると、其境內に在る石の五百羅漢の首を杖をもつてなぐつてまはる。さうすると首がころ〳〵と轉げる。其を取つて其傍に在る經藏の中に投げ込む。現に或人の子供の時分にはもう殆ど首が無かつた、僅に十許り殘つてゐたのを此人なども其をなぐつて

經藏の中にほうり込んだ一人だといつてゐた。扨其經藏は三面壁で一面開いて居る、其前には千年の杉の立木が七八本あつて經藏の中は薄暗い、其中を覗いて見ると正面に煤けた佛が祭つてあつて其左右に棚があつて其に宋版の卷物になつてゐる一切經が入れてある、其に五百羅漢の首を投げ込むのであるから、左なきだに取り亂された經卷がいよ〳〵取り亂されて、薄暗い中に源氏の白旗の如き者が縱に長く流れてゐるのは、お經がほどけて棚の上から地上まで垂れてゐるのであつた。暗い中に此ほどけて垂れたお經が白く見えて居たのは殊に傷ましい光景であつた、其又地上を見ると累々として五百羅漢の首が山のやうに積上げられてあつた、其羅漢の各樣の顏附きをしてゐた首は恰も斬られる當時しかめつ面をした罪人の首を彷彿せしめた。其後住持が變つて經卷を整理し、首はありたけ胴につぎ足し、今は維新當時程には荒廢して居らぬ。而も往昔の喜多院の面影は見ることが出來ぬ。

此五百羅漢の首を取つた惡太郎のうちに今の淺田中將も居た筈だと、或人は附け加へていつた。

並び立つ五百羅漢や雪の庭

冬日和

余は玉川堂で筆架に墨臺に唐墨を買つて大得意で九段の坂を上つて歸つて來る。招魂社の境內に這入つてふと見上げると大村兵部卿は刀の柄におかめの紙鳶をぶら上げて大意得で居る。

この上に支那水仙をのぞみけり

照葉狂言

照葉狂言といふ言葉は鏡花の小説によつて今の青年の記憶にも止まつて居るであらう。維新前堀井千助といふものゝ一座があつて余が故國松山などへも屢ゝ來たことがあつたさうだ。是が照葉狂言の創始者であつた。此千助は後に惣右衛門と改名して其息子が千助となつた。其千助の弟子に泉重三郎といふのがあつて、其妻の小もと、妾の小里といふ二人の女と共に一座を組織して諸國を打つてまはつた。此小もと、小里の二人は余も十歳前後に一二度見た事がある。現在東

京に居る泉祐三郎は重三郎の弟子で、其妻のお作は小里の弟子である。初代二代の千助時代は眞面目な能であつて、唯所謂お能役者の外に、興行物として立つて居た爲め、揚幕を上に揚げず、横に引いた位の差違に過ぎなかつたさうなが、重三郎時代から女交りとなつて三味線を入れ踊をつぎ足す現在の照葉狂言となつた。

余が中學校に居る時分今の祐三郎一座は屢ゝ國へ來た。當時は脇師から囃子方、地謠に至るまで取揃へた大一座であつて、中には立派に謠もうたへ皷もうてるものがあつた。主として加賀あたりの士族の果てだと聞いてゐた。併し仕手若くは連れとして登場するものはお作を始め其娘及び其弟子の女達で、祐三郎は主として狂言をやつてゐた。芝居などは見るもので無いといふ古風な家庭でも此照葉狂言だけは見ることを許されるといふ風で、落ぶれ乍らも尙ほ士族の面

影を存してゐた時代は堅くるしい見物人も少くは無かつた。併し余が中學校を出る時分からは見物人は一變して町家の人々や學校の生徒などが多分を占めてゐた。

余は京都に行つてからも屢〻此一座を見た。四條の南座で樂屋に這入つて、國許の某から依頼された用事を傳へる爲め、長火鉢を隔てゝお作と話した事もあつた。西陣の岩上座に居る祐三郎と一緒に金閣寺の長老を雪中に訪ふたこともあつた。折柄長老は不在であつたが、方丈で餅をやきながら中で皺の多い老僧が「坊ンはどこにゐなはる」と余の帽子を見ながら「吉田の學校か、そらえらいこつちや、祐三郎と一緒ぢやなうても時々一人で遊びにお出で、サァあんもが燒けたおたべ」と親切に余を遇して呉れたことも尙ほ記憶に殘つて居る。も一つ當時の白紙のやうな余の心に一點の艶味を薄紅の如く點じた事がしかと記憶に

留つて居る。其は此一座にお千代といふ美人が居つた。まだ十三四の小娘であつたが他の多くの娘達の中に際立つて美しかつた、或時樂屋に遊びに行つて居つた時、便所に行かうとしたら偶〻便所に火が無かつた。お作は「千代ちやんあかりを見せてお上げ」と衣裳を半分つけかけてゐたお千代に命じた。お千代は「ハイ」といつて手燭を取つて余を便所に導いてくれた。見ると何であつたかまだ白い下著許りを著けてゐて、腰帶も締めずにゐたのを片手で假りにからげて、片手に手燭を持つて、先きに立つた姿が非常に艶であつた。殊に其無邪氣なキラ〳〵光る眼で「そこがあぶなうおす」と、一段緣の下つてゐる處を降りかけた余の足許をはしこく見かへつた時は、手燭の光りをまともに受けて、其光りが白い衣に照り榮えて其顏の薄く紅を潮したのに反映して何ともいはれぬ美しさであつた。

京都を去つてから殆ど十五年間余は照葉を見なかつた。お作と娘は一度余の宅へ來たこともあつたが唯雜談して歸つた許りであつた。今度計らずも新年俳句會に俳書堂の寄附で久々に照葉狂言を見た。祐三郎は昔の如く童顏ではあるが鬢に白い霜を置いて居る。お作の顏にも皺が殖えた。長女のお房といふのは知つてゐたが、薫、松代といふ次女三女の藝は此日初めて見た。松代といふのは松山滯在中に生れたので斯う名づけたのだといふ事も此日初めて聞いた。今は昔の如く大一座では無い。唯親子五人で座敷を勤めてゐるさうな。お作は型も謠も舊によつて旨いものだ。ヘッポコのお能役者よりも遙かに旨い。

お千代はどうしてゐると聞いたら、今は人の奥樣で子供が二人あるといふた。

餅燒いて今も春や待つ金閣寺

影法師

西洋では惡魔に影法師を賣るといふ傳說があるさうだ。それは惡魔には影法師が無い、惡魔は寶の袋と交換に人間から影法師を買ひ取る、貧乏人はつい慾に眼がくれて影法師を賣る、其人は人中に出て影法師が無いので擯斥される、といふやうな話ださうな。我國にも、變怪のものが人間に化け遂せてゐても影法師だけは正體の映つて居る圖が草双紙などにあるやうだ。此方は少し理窟つぽいが影法師の賣買は詩的で面白い。

招魂社の境內を散步する。よい天氣だ。社の影も樹の影もくつきりと地上に映つてゐる。子守の影も兵隊の影も飴賣の影も風船屋の影もくつきりと地上に映つ

てゐる。一人も影法師を持たぬ奴が無い。一人位惡魔に賣つた奴が居さうなものだと頻りに探しても見當たらぬ。氣の利いた奴が一人も居らぬのが腹が立つ。よろしい、それでは自分が一つ賣つてやらう、寶の袋を持つた惡魔は居ないか、と暫く其邊を探しまはる。よく壯士芝居などで見る高利貸らしい男が革袋を提げて通る。影法師は余のよりも濃い奴を持つて居る。たとへ此人が惡魔であつたにしても、もう誰からか買つて居るのでは話にならぬ。當り屋らしいのが通る。これも眞黑な奴を持つて居る。細君の指輪よりも高い値で買つたのかも知れぬ。おれならぐつと安値で賣つてやるに馬鹿な奴だと思ふ。婆さんが通る。突出した腰の上に白い風呂敷包みを載せて杖と頭で空氣を搔き分けるやうにして通る。こやつ惡魔かと瞳を据ゑて見たが矢張り影法師はある。其上此の腰の上の貧しげな白い風呂敷包みに寶はありさうに見えん。靴をはいた田舍者が通

る。いつか西洋のポンチ畫で見た惡魔の穿いてゐたのに似てゐると思つたが後ろから赤い腰卷きをまくり出した十七八の娘が「おとッつアンー、大村さんの銅像たァこれかァー、さつきのはそぢやーねエのかァー」とか何とかいふと、振り向いて、「あれは川上大將のだーョ」といふ。惡魔で無い、善良の民だと斷定する。影法師を賣つた奴も居なければ惡魔も居らぬ、つまらぬナァと銅像の下の大砲の上に腰を下ろすと、其の拍子にハタと悟る。居らぬ筈デャ、西洋では無かつた。

其から今度はせめて日本的の、影法師にだけ正體の映る變怪のものを見屆けくれんと其邊を見渡すと、來た〳〵、富士見町の藝者が二人連で來た。長い裾に下駄をかくして帶をひつかけに結んで足の爪尖で空氣を蹴るやうにして、白粉のついた色のさめた襟に顎を埋めて、根のゆるんだ島田をがくり〳〵させながら、

肩と肩とて推し合ひをするやうにくつゝいて來る。正しく變怪のものござんなれ、いで正體を、ガガガガガ、見屆けくれん、と左の足を一歩あとへ、右の足を一歩前へ、高く大地を躍るやうに踏んで、右の掌を口の前に持つて行つて鼻の方へ摩り上げて、空目を使つて其影法師をハタと許りに睨んで見る。ところが矢張り藝者の影法師であつたのでォーヤォヤと失望する。

地虫穴を出る

今日も表を歩く。少し暖くなつたので地虫穴を出るといつたやうな顔が澤山ある。其一二をいふと、黄八丈の綿入に黄八丈の綿入羽織を著た體格の大きい、

さうして色の惡い、白い口髭の生えた六十餘りの人、一寸谷干城さんが頭巾を著て、水ぶくれになつた、といふやうな人。も一つは頰のこけた鼻も目も尖つた口の引締まつた、胡麻鹽頭に山高帽を被つて、長い體をチャンと垂直にして、時々首は動かさずに其尖つた目だけで劍呑さうに地上を見て、スラッキと三本足で歩く人。今一つは紀章のついた學校の帽子を被つて、鼻あたりまでぐるゝ卷きにした白い頸卷の端が背中に垂れてゐて、帽子と頸卷の間に光つてゐる白目勝の目てギロ〳〵と人を見て、白い鼻緒の麻裏草履に紺足袋を穿いた大きな足で地を磨るやうに歩いて、さうして其歩く度に長い肢の少しゆるんだ蝶番ひがガクリ〳〵と音がしさうに見える人。美くしい切り下げの、油がてかゝと黑く光つて、櫛の齒が一筋も亂れず。其端が鼈甲の切り下げ留めで留めてあつて、手袋をはめた手を蝙蝠のやうに双方に突き出して居るのを左右につ

いて居るお附きの女中が大事さうに取つて傍目も振らず濟まし込んで歩く五十恰好の人。……

右は小川町から九段坂下に來る迄に目に留まつた一二。折節坂下に電車が止まると、ヒラリと輕く下りたのは西洋人で、つゞいて二十人許りの洋服を著た學生が下りる。曉星學校敎員と生徒であらう。何れも潑溂として居る。中には蹈臺を蹈まずに勢よく飛び下りるものがある。是等は穴を出る地蟲で無くて、雪中にも飛び囀る寒雀の類であらう。折節又飯田町の方から鐵蹄の地響きが聞こえて、十騎餘りの騎兵が砂煙りを立てゝ來る。銃が背中で踊つて赤い頰に汚れた汗が見える。此は樟の枯枝に　をつくる荒鷲の類であらう。

そこ行くは猫　戀とぞ覺えける

秋の山

鳥羽の城南離宮のすぐ傍に秋の山といふ名處がある。戀塚寺ともあまり離れず居らぬ。謠にあつたのか、古人の俳句にあつたのか忘れたが、「鳥羽の戀塚秋の山」といふのは語呂がよい文句なので自然に口に出る。戀塚も荒廢してゐるが、まだ修覆される見込がある。秋の山は元來餘り大きな山でも無かつたのだらうが、今は高さ一間許りの子供が二三人ほか上れぬ程の土の塊りに過ぎぬ。聞くとだん〳〵缺き取つて畑にするとの事だ。名が秋の山だけに殊に哀れに覺える。昔は離宮の中に在つたお山ださうな。せめて此一塊の土だけでも永く保存して置き度いものだ。

主觀的の旅

蚯蚓泣き螻姑守るなり土一杯

主觀的の旅

碧梧桐の旅が羨ましい。留守番を仰附かつた余は二進も三進も動く事は出來ぬ。旅がし度い〳〵。

斯う考へて見る。人世は逆旅と古人も言つたやうに、胎内から墓中までの人の生涯は旅である。東京は驛路だ、我家は旅宿の一間だ、軒端の桐一葉も、門前の行人も、裏戸にからむ朝顔も、緣にさし込む夕月も皆旅中の景だ。書を讀むのも、文を書くのも談話をするのも、人を訪ふのも皆旅路の事だ。さう思ふと

夕飯を食ふのも淋しい、蚊を打つのも淋しい、旅情がそゞろに動く。斯う考へると態々旅に出なくともよい、既に今日が旅だ、我家が旅だ、朋友妻子は旅の伴侶だ。

昔鬼貫に「禁足旅記」がある。これは足門を出でずして心を山川に走するのである。其もよいが其にも及ぶまい。我家に在つて我家を旅宿と思ひ我身を旅人と思へばよい。日常の事いづれか旅意に非らざる。あら淋しさ秋の夕や。

俗の我れつく〳〵法師と路旅かな

馬に乘る人

人が馬に乘つてゐるのと猿が犬に乘つてゐるのとどれだけ違ふのだらう。猿が

犬に乘つて澄まして居るのを見ると人は皆笑ふ。其に人が馬に乘つてゐるのを見ては不思議にも思はぬらしい。犬の顔と馬の顔とどちらがをかしいかといつたら寧ろ馬の顔の方がをかしい。猿の顔と人の顔とは猿の方がをかしいが人の中にも猿以上のものが無いでも無い。一つは見馴れて居るのと一つは自分の仲間の事なのでをかしくも思はぬのだらうが、考へて見ると人が馬に乘つてゐるのも滑稽だ。人間は自分ぢいきで勝手な區別をつけるが雲に乘つてゐらつしやる神樣の眼から見たらどちらも同樣に滑稽なのに極つてゐる。

木の實食む猿葡萄食ふ人の秋

天花

天から花が降るといふ事はお釋迦樣の說法の時や、天人の天下だつた時などに常に引合ひに出る文句なので、一寸聞いたゞけでは又例のかと格別の感じも起こらぬが、よく考へて見ると旨い事をいつたものだ。

雪が降る時は空が曇つて居るが、花が降る時は恐らく晴れ切つて居るであらう。何だか變だと大空を仰いで見るとキラ〳〵と埃りのやうな者が降つて來る。だん〳〵と地上近くなつて來ると、其埃りには色がある。赤いのもあれば紫もあり黃もあり白もある。其各種の色の混つた埃りはもう目の前に降つて來る。見ると悉く美しい花だ。多くは櫻の花から菫位の小さい花だが中には例の摩訶曼陀羅華、摩訶曼珠沙華といふやうなすばらしい大きな奴も交つて居る。さういふ奴が一としきり降つて地上が悉く花で埋まつて雀も鴉も其の中を飛ぶ、汽車も電車も其の花の中を驅ける、ヲワイ屋も其花の中をヲワイ〳〵といつて通

る、軍艦も花の波を切つて走る、などは面白いと思ふ。夢にてもよいから是非一度はさういふ景色に出會つて見度いものだ。「虛空に花降り音樂聞え靈香四方に薫ず」といふのは「羽衣」の文句だが、白龍先生は、あつらへ通り花が降つた上に、尙雲際から例の簫笛琴箜篌の上にピアノ、バイオリン、三味線、胡弓、尺八などの錯綜した音樂を聞いて、其上又靈香迄嗅いだといふのだから浦山しい次第ではあるまいか。但し斯ういふ時には往々大地が六種に震動する事がある さうだ。表を通る大八車て家がゆれるのでもあまり善い心持ては無い。地震嫌ひの余に此六通りの地震だけは眞平だ。

かゝる事も思ふや秋の日南ぼこ

春光秋色

寒さが暑さに變る時に天は煩悶して五月雨を降らし、暑さが寒さに變る時に天は煩悶して野分を起こす。斯く天が大煩悶をする前後に地も亦た大懊惱をする。其結果は樹や草に美くしい花を附ける。寒さが暑さに變る時には梅が咲く、椿が咲く、海棠が咲く、木瓜が咲く、木蓮が咲く、櫻が咲く、藤が咲く、躑躅が咲く、其他百木の花が咲く。暑さが寒さに變る時には朝顏が咲く、萩が咲く、女郎花が咲く、紫苑が咲く、野菊が咲く、蘭が咲く、菊が咲く、其他千草の花が咲く。春光秋色は夏と冬との爭ひに天地が悶へ苦しむだ結果である。

小說は人間の世の花野かな

囃子會

明日或囃子會があつて余は「融」の大皷を打つ事になつて居る。其が何となく樂しみだ。子供の時分にお祭りを待つのと同じやうに樂しみだ。同時に其お祭りの濟んだ時の子供心の淋しさを思ひ出す。

幼稚な樂しみだ、果敢ない樂しみだ、と自分で一寸考へて見るが、すぐさうで無いと打消す、人間一生何物かを待つやうな心持は丁度明日の囃子會を待つのと同じである。あすの囃子會を待つのは人間一生の希望をコンデンスしたやうなものだ。人間一生を濟ました時薄ら淋しく感ずるのはあすの囃子會を濟ました時薄ら淋しく感ずるのと同じ事だ。あすの囃子會を待つ心も考へやうによれば長い。人間一生も考へやうによれば短い。幼稚な樂しみでも無い、果敢ない樂しみでも無い。若しこれが果敢なければ凡ての樂しみが皆果敢無い。

これも文章を作るとか畫を書くとかいふのならば其作品があとに殘る。大皷を打つのは唯其打つ瞬間のみで其音は其時に消えてあとに何物をも止めぬ。これが果敢無いのだと又自分で一寸考へて見る。すぐ又さうで無いと打消す。詩歌繪畫はあとへ殘るだけ罪がある。よく出來た詩歌繪畫には誇りの色を止める。惡く出來た詩歌繪畫には悔みの色を止める。音樂になると妙に奏せられたのも下手に奏せられたのも其瞬間で消えてしまふ。詩歌繪畫は人死してミイラに醜態を止めるのに似て居る。音樂は所謂四大空に歸し去るもの、其音の空氣の波動によりて無邊空際に飛散する時人世の縮圖がぱつと描かれたやうな氣がする。

詩歌繪畫の世に傳はるといふのも考へやうによれば短い。音樂の直ちに消え去るといふのも考へやうによれば長い。若しこれが果敢なければ人世其ものが已に果敢ないのだ。

とかう考へて又明日の囃子會が樂しみだ。

十あまり皷焙じる大火鉢

木枯

室内に坐して居ると表を吹く木枯の事は忘れて居る。唯障子の破れから吹き込んだ一枚の木の葉を見て、木枯が吹いてゐたのだわい、と氣が附く。ぱた〳〵

と鳴る裏戸の音を聞いて、これも木枯の吹きあほつたのだなと氣がつく。

併しこれは大人の事だ。おもちやを持つて遊んで居る小兒は唯疊の上に落ちた木の葉のみを見る。裏戸の鳴る音のみを聞く。木枯の事は念頭に浮ばうともせぬ。況んや、此の疊の上の木の葉と裏戸の音との間に連絡があらうなどゝは夢にも思はぬ。

無邪氣な世間の人が世間の出來事を見るのは、恰も小兒が疊の上の落葉を見、裏戸の音を聞くのに類して居る。此落葉と裏戸の音とは彼等に取つて別々の現象とほか考へられぬ。唯學者、世故に長けた人、苦勞人、などいふものが、學問上、經驗上、思索上兩者の奥には木枯なるものが伏在してゐるとを知る。

小說家なども此苦勞人の一人である。

木枯の吹き當て高き塀もあり

埃

地上に埃りが立つ。

此埃りを立てる風は唯其まゝに靜づまる根無し風であらうか、又やがて來る强風の前驅であらうか。

此埃りに吹き卷かれて姿の見えなくなる人もある。埃りを除けて風筋の外に立つ人もある。此風筋の外に立つ人にも二樣ある。埃りはすぐ靜まるものと輕蔑して意に介さぬ人、埃りは下らぬものながら其あとより來る强風を價値あるものとして輕視せぬ人。

今の文壇にも此埃りに吹き卷かれて姿の見えなくなつた人、埃りはすぐ靜まるものと輕蔑して意に介せぬ人。埃りは下らぬものながら其あとより來る强風を價値あるものとして輕視せぬ人の三種類があるやうだ。

風の神樂はいてゝ來りけり

百八の鐘

今此原稿を書いて居る時百八の鐘が鳴つて居る。何處かで花火の上る音も聞こえる。机の上の時計を見ると十二時に十五分過ぎて居る。いつの間にやら明治四十年になつたのだ。

下町はまだ夜を晝の國といつたやうな騷ぎであらうに上町の方は大分淋しい。近い邸のうちでは火の用心の拍子木が鳴る。其でもまだ人の足音の絶えぬだけが頼母しい。余は毎年大三十日の夜は長起きをする。百八の鐘を聞きながら買物に行つたり、用事もないのに神田あたりをぶらついたりする。今夜もどうやら尻がむづ〳〵するがあすの朝旅行せうと思ふので辛抱して仕事をする。表はあるかぬが矢張り夜更かしはする。世間の人は大方止むを得ず夜更かしをするのであらうが、余のは晝間に片づけば片づく事を態々片づけずに置いて夜更かしをするのだ。大三十日夜更かしの彌次馬といふ格だ。

世間並といふ事は平凡といふ事だ。余は平凡が好きだ余は世間並が好きだ。大三十日に夜更かしをするといふ事の中には余に取つて悠遠なる趣味がある。

寒き影浮世法師と映りけり

時候

余は子供の時人間の力を信ずることが強くて自然も人間の力で征服し得るものと信じて居た。父が死んだ時も、父はまだ死ぬるのでなかつた、醫師が庸醫であつたので助かるものを助けなかつたのだと思つてゐた。

だん〳〵年を經るに從つて人間が常に自然に破られる事を經驗した。初め偉大と認めてゐた人間の力の極めて微弱なことを知つた。初め微弱と思つてゐた自然の力の極めて偉大なことを知つた。

時候は偉大なる力の一つである。我家族の多くは此頃の時候に冒されて皆多少

づゝ病んで居る。昨夜醫師が來て、元田肇氏の家族は皆インフリユーエンザにかゝつて居るが中にも元田氏は肺炎を併發して、危篤だといつた。昨日は厭やな天氣であつた。

今朝起きて天氣具合はどうかと思つたら非常な好天氣で格別に暖かゝつた。此暖い爲に助かつた病人は決して少くなくあるまいと思つた。元田氏も必ず危機一髮の處を踏み止めたであらうと想像した。

斯ういふ時には藥もストーブも障子一尺の日影に敵はん。

冬日影南天の實も映りけり

疑ひがある

坂の中途で荷車が一臺行き難んでゐる。後ろから印袢纏を着た男が來かゝつて「よい推すよ」ともう手をかける。見ると左の手には重さうなものを持つて居る。右の手で推す。「ヤレショ」と景氣のいゝ聲をかける。「どうもすみません」と荷車ひきは禮をいつて「コラショ」と應じる。「ヤレショ」「コラショ」と暫くして車は坂を登りきる。「御氣の毒さま、すみません」と車屋は再三繰りかへす。「ェーン」とか何とか其方は見向きもせず印袢纏はいつてしまふ。余も印袢纏の來る前此車を一寸は見兼ねたのであつたが、「よい推すよ」と無造作に手を掛ける事が出來なかつた。思ひながら實行が出來なかつたのは惡い心持ちだ。吾終に印袢纏に若かぬやうな心持ちがする。

併し萬一山縣侯とか西園寺侯とかいふ人が何處かの坂で荷車の後推しをして「ウーン」「コラショ」「ウーン」「コラショ」と調子の惡い掛聲で汗水を垂らしてゐ

たといふ事が假りにあつたとしたら世人は何といふであらう。早速翌日の新聞にボンチとして出る位が落ちであらう。熊公が後推しをするのは感心で山縣侯が後推しをするのが何故ボンチの材料になるのであらう。余は此點に於て疑ひがある。

電車の中で婦人と見ると早速立つて席を讓る。これは惡い感じては無い。時には「もう此の次ぎで直ぐ降りますから」と辭退する細君を「まアお掛けなさい」と無理にすゝめて掛けさすのもある。これは坂の荷車を推してやるよりも目立たぬ事で余の如き思ひ切りの惡いものもう屢〻實行して居る。

併し一旦東海道の直通汽車で、後れて乘つた二三婦人が空席の無いのに困つた末、毛布を通行路の上に敷いて荷物に凭れてゐるとする。其時立つて自分の席を此婦人に讓り自分が代つて通行路の上に洋服の窮屈な膝を折つて坐ることを敢てする紳士があるであらうか。十分乃至一時間の席は慌んで讓るが二十時間の席は容易に讓れぬのであらうか。余は此點に於て疑ひがある。

我門の雪のみ掻きてゐたりけり

刼

時間の長い事を、さゞれ石の巖となりて苔の蒸すまで、といふのは日本人の思想だ。彼の刼といふ字を印度人は種々に解釋して居るが中にも天人刼といふ解がある、其は地上に方百里の盤石がある、天人が三年に一度天から降だりて來て其盤石に羽衣の袖を觸れる、斯くして其盤石が消磨して無くなつてしまふの

を一切といふ、といふのである。これはどうしても印度人の思想だ。

賢劫の中に梅咲く此日かな

初一念

家族に病人があつた爲め暫く筆を休んで居つた。扨初戀の回想は樂しいなつかしい、初戀に限らず何事も初一念はいつ迄經つても強く心を牽く、小説家にならう、といふ余の初一念はいつも余を十七八の昔に若がへらす、松山の玉川町の二階の書齋に仰向けに寢ころぶと天井に小説の筋書きが映る。枕にして居る本は坪内氏の小説神髄、高田氏の修辭學、梅花道人の新體詩集、近松の世話

淨瑠璃、早稲田文學、しがらみ草紙、國民の友、露伴氏の風流佛等であつたかと記憶する。トン〳〵〳〵と梯子段を昇つて來た人は誰かと思つたら、子規子であつた。袴を穿いて風呂敷包みを持つて居る。今日は喜安から頼まれて文學の講演をやつたのよ、と風呂敷から出たものは浪六氏の三日月であつた。浪六は文章がうまい、文章の結末の一句に非常に力がある、其が爲め文章全體が引きしまる、此句なんか旨いぢや無いか、と細長い瘠せた指で何か一句を指示された。そんな句がうまいのかなァ、と余は意外に思つた事などもあつた。これは子規子が夏休みの歸省中であつたが此年の冬「月の都」といふ小説を書かれた。

常に此樓上に來た碧梧桐も小説家になる積りであつた。滿腔の希望を抱いて碧梧桐に送られて余は郷關を出た。希望といふのは勿論小説家になるといふ事で

あつた。其から京都、仙臺と彷徨して終に學校生活を止めた。碧梧桐も同時に止めた。兩人共小説家になる積りで止めた。其から東京に來て兩人共小説家にならずに俳人になつた。是より先小説家になる筈であつた子規子は已に既に俳人であつた。

碧梧桐は何と思つて居るか知らぬが余はまだ小説家になる積りで居る。理窟に於ては俳人も小説家もたいした相違のあるもので無いといふ事は知つて居る。けれども俳人で一生を終るといふ考へは今に於ても毛頭無い。余は小説家になる。忽として三十四歳の余は十八歳の若者となる。一昔半の昔にかへる。松山玉川町の二階に戻る。世路の艱難といふのも大袈裟だが、余の如き空漠たる希望を抱いて世の中へ飛び出したものが必ず踏まねばならぬ世路を歩んで、さうして唯歩むのに日が暮れて十五年間經つてしまつた。小説家になるといふ余の初一念からいへば此の十五年間小説を書かずに終つたのは殘念だ。併し其間官吏や職工にならずに俳句を作つたのは幸福であつた。或は今迄小説を作らずに俳句許り作つてゐたのが小説家になるといふ事の爲めにも却て仕合せであつたかもしれぬ。今の若き人々に比すれば余は非常に出遅れて居る。併し成敗は問題にならぬ。問題になるものは初一念の執着である。立志篇的の堅くるしい初一念ではない、初戀的のスイートな初一念である。などと考へつゝ病兒の脈を取り呼吸の數をはかる。二月十日、午前四時。

美人論

畫に書きて劣るもの、物語りにめてたしといひたる男女の形、とあるのは僞のない處だ。美しい女といつたゞけでは、之を聞く人はめい〳〵の頭の中に藏ひ込んである理想的の美人を彷彿せしめる。こゝに於て話手一人、聞手十人併せて十一人がめい〳〵勝手の者を想像するので、美人といふ言下に十一人の違つた美人がぱつと一時に現出するわけだ。こゝが耳を媒介にする文學の重寶なところだ。畫になるとさういかぬ、どうても斯うても書き現はさねばならぬ。畫書きが非常の能手であつても其の畫書き一人の理想美人が書けるだけで他の人々の理想には旨くはまらん。況んや技倆がたいしたもので無い日には折角の美人もだいなしになつてしまふ。

近來小說を芝居にすることがはやるが、其小說が下らぬものであつても、其中に在る美人は矢張りめい〳〵て好きな美人に想像して居る。舞臺に出る美人が假令一通りの美人であつても見物人は十中八九迄滿足せぬ。ましてあまり美人で無いものに於てをや、といふわけて、いつも厭やな感じだ。美人は一例だが、凡ての點に於て此傾向は免れぬ。

此點から行くと舊俳優的(殊に時代物的)に或一定した厚化粧をすると萬事が類型的に成つて醜面も或點迄隱くすことが出來る。京都の遊里の女の舊式の厚化粧も同理に基く。

蓋棺論

雪よりも白しといへば美人かな

人が自分をえらいと思つて呉れてゐるだらうか、思つてゐて呉れてゐないだらうかと氣をもんでゐる人は感心しない。果たして自分はえらいのだらうか、えらくないのだらうかと獨りでお腹の中で氣をもんでゐる人も感心しない。えらいのかえらくないのかは他人には固より、自分自身にでもちよつくらちよいとわかるものでは無い。そんな事に氣をもんでゐるひまに何でもやつて見て何にでもぶつかつて見る事だ。やつて見てぶつかつて居るうちに段々自分がわかつて來る。棺を蓋ふて後に事定るといふのはこゝの事だ。髑髏の豁眼を開いて見て初めて自分がどれだけえらかつたか、どれだけ馬鹿だつたか合點が行く。他人も其時分に自分のねうちを掛値なしに踏んで呉れるだらう。人が何と言はうが自分のやり度い事はやるがよい。やり度い事をやつて自分の馬鹿であつた事を明白にするのも愉快では無からうか。

園栗院里芋居士と書かればや

或人曰

或人曰、世の中には可成自分の缺點を隱くして人から輕蔑を受けないやうにせうと心掛ける人が多い。さうあるべき事で結構な心掛けだが、僕はさういふ事は少し面倒に思ふ。それよりも自分の長處も短處もありたけさらけ出して、拙者は御覽の通りのもので御坐る、をかしければお笑ひ下され、可愛想と思召さばお憐み下され、癪に障ればお怒り下され、感心なさればお讃め下され、いづれも樣御勝手次第と、悉くがさう大膽に行かぬ迄も、先づ其方が好き、出來べくはさ

うあり度いといふ念願だ。扨て其結果どうあらうかと考へて見る。要するに缺點の多い許りで一々其缺點を隱くすのが面倒でたまらん處から斯ういふ考へも割出した譯なのだから、其さらけ出した處を見たら定めて鼻持のならぬ程缺點だらけであらうと想像される。是は氣取つていふのでは無い實際の話だ。さうして一點の自惚れは其缺點許りの中に唯一つ位はどうかした長處があると自信して居る。僕は百の缺點を人から指摘されるのは苦痛で無い、唯此一點の長處を人から認識されぬのが何よりの苦痛だ。僕が一生の願ひは棺の中に這入る時自分で顧みて見て扨て僕にどんな長處があつたらう、あれでもない、これでもない、それでもない、と一々數へて見た末。これだ／＼この一點だけ　一寸眞似手のない僕の長處であつた、と自分で合點がいつたら是程愉快な事はあるまいと思ふ。現在では何が何やらわからず唯其日の心次第でやり度い事をやつて居る、何が自分の長處だか短處だか少しも見當がつかぬ、さういふ時に人からこゝが君の長處だと僞にも讃めて貰ふのは善い氣持ちだ、これ／＼が短處だと惡口をいはれる方は左程に痛痒を感ぜぬ、若し君には何にも長處が無いとてもいはれうものなら僕は憤死するかも知れぬと。

冬瓜を以て自ら居る士かな

理窟をこねぬ人

人間は概ね感情によつて云爲するものであるが、表面には立派な理窟を押し立てゝ居ても核を割れば皆感情だ。さうとわかつて見ると、人を攻擊するのも面

倒臭いし自分の攻撃された場合辯解するのも面倒臭い。何も上つ皮の理窟をこねなくとも感情から割出して見てちやんとわかつてゐるやうな氣がする。其が實際わかつてゐるのかゐないのか其は別問題ぢやが、兎に角自分ではわかつた積りてゐるから、其に強ひて理窟をくつゝけて、下らぬ論爭で日を暮らすのは馬鹿〳〵しいやうな氣がする。

併し社會的の名譽を保持する爲には之は損だ。双方共に五分〳〵惡いところがあつても、強ひて其感情に理窟をつけて自分の方を尤もらしくする理窟論者の方が社會の耳目には立派に見える。立派に見えるとか見えぬとかいふのは贅澤の部に屬するが、其れ所ては無い、理窟嫌の感情論者はうつかりしてゐる間に理窟論者の包圍攻擊の下に社會の水平線下におつぽり出されて了つてゐる。

理窟をこねぬ放膽な實行家は氣持ちがよい。併しそれでゐて清名を望むのは無益だ。

冬構へ　郷先生　の　高木かな

專門醫

專門醫は些細な病を大層にいふて徒らに療治を長びかす、といつて小言をいふ人がある。今回專門醫に治療を受けて見て此小言の愚を知つた。普通の醫者は唯目下の病を治ひる事を目的として居る。專門醫は病源を根治することを目的として居る。普通の醫者より見れば些細な病氣も專門醫より見れば大病である。余は專門醫の病を大層にいふて療治を長びかすのを快とする。

木の葉降るこれより春に九十日

専門家

専門家がやつて居る仕事振りを見ると存外のろい。其頭もたいしてえらさうにも見えん。そこで年少氣鋭の才子はフンと鼻て輕蔑する。馬鹿な事をやつてゐるなア、おれがやつたら半分の時間で倍以上の功績を收めて見せる、などゝいふ。

専門家の貴とい處は一日も間斷なく其事に携はつてゐる點に在る。其一日々々の仕事を抜き出して見たら局外者に劣る事も多々あらう。唯局外の才子は或一

日だけの仕事を自分と比較して見て兎角の言を弄したがる。其次の一日、局外の才子が何事をもなさずぼんやりとして居るか又今度は他の専門家を同樣の觀測をして居る間に、前の専門家は前日同樣の事をやつて居る。局外の才子は斯くして其爲すこと一日々々轉變して行く間に迂愚(?)なる専門家は毎日々々同じ事に鞅掌して居る。たとへ時々休息し、他の事に關係するとがあつても念頭には其考へが離れることが無い。専門家の仕事はさうテキパキしたものでは無い、専門家の頭はさうえらいものでは無い、實際才能の點からいつたら世間の普通の才子に劣るものも少くあるまい。唯彼は自分が嗜き好んでか、若くは職業として止むを得ずか、いづれでもかまはん、要は朝暮其仕事に携はつてゐるといふ點が貴といのである。

天下のあらゆる専門家を尊敬するがよい。

教育法

聲冴えて下駄の歯入の通りけり

教育法

寳生九郎が弟子を仕立て上げるには決して我意を出すことを許さぬ。唯一意自分の敎へる型を嚴守せしめる。さうして三十になる迄も四十になる迄も敲きに敲き練りに練つて殆ど同じ鑄型にはまるものを作り上げさうして其うちに隱くされぬ特性が現はれて來るのを待つて居る。能樂などを敎へるには是非此方法に據らねばなるまい。其丈の鍛錬の出來ぬ藝は巧でも賤しい。品位が無い。

俳句の修業はいかなる方法に據るべきか。子規の敎育法は成可人々の個性を發達せしむるに勉めた。能樂は型を守るもので俳句は創意を貴ぶものであるから本來此區別はあるべきであらう。併し此二敎育法は並び存して行はるべきで、其藝其人に由つて指導者の胸に生きた物差しを置かねば上手、名人は作れまい。

百姓は同じ案山子を作りけり

面會日

面會日

毎週木曜日午後三時より漱石氏宅の面會日になつて居る。今週の木曜夜訪問。席上に在るもの、主公、坂本四方太、松根東洋城、中川愛之助、森田白楊、瀧田櫟陰、鈴木三重吉。定連の内寺田寅彦氏を缺くのみ。問題は例により寫生文

面會日

面會日

論、小說論等。

墮落文學といふ名は四方太氏が漱石氏の草枕に對する惡評、白紙文學といふ稱呼は漱石氏が四方太氏の寫生文に對しての冷評、鈴木三重吉氏は「おいらん憂ひ式」を具體的にしたものといふ自作小說の吹聽、余のシャボテン趣味なるものは白楊氏の一喙に値ひせず、楊陰氏の寫生文萬能主義、東洋城氏の床屋の鏡評釋、中川氏の寫生第二義說、お仕舞には紛糾錯綜して彼處此處に三通り程の問題が同時に論爭せられつゝあるので何が何やらわからぬ事になつてしまつた。例の通り惡口のいひつこで談笑如湧。散會午後十時半。

紫の雲は昇らず神無月

「二百十日」に「嵐」

漱石氏來書。――「二百十日」をお讀み下さつて御批評被下難有存じます。論旨に同情がないとは困ります。是非同情しなければいけません。尤も原因が明記してないから同情を强ひるわけにゆかない。其代り原因を話さないでグー〳〵寢て仕舞ふ所などは面白いぢやありませんか。そこへ同情し給へ。碌さんが最後に降參する所も辯護します。碌さんはあのうちで色々に變化して居る。然し根が呑氣な人間だから深く變化するのぢやない。圭さんは呑氣にして頑固なるもの。碌さんは陽氣にしてどうでも構はないもの。面倒になると降參して仕舞ふので、其降參に愛嬌があるのです。圭さんは應揚でしかも堅くとつて自說を變じない

處が面白い。餘裕のある逼らない慷慨家です。あんな人間を書くともつと逼つた窮屈なものが出來る。又碌さんの樣なものを書くともつと輕薄な才子が出來る。所が「二百十日」のはわざと其弊を脱してしかも活動する人間の樣に出來てるから愉快なのである。滑稽が多過ぎるとの非難も尤もであるが、あゝしないと二人にあれだけの餘裕が出來ない。出來ないと普通の小説見た樣になる。最後の降參も上等な意味に於ての滑稽である。あの降參が如何にも飄逸にして拘泥しない、半分以上トボケて居る所が眼目であります。小生はあれが掉尾だと思つて自負して居るのである。あれを不自然と思ふのはあのうちに滑稽の潜んで居る所を認めないで普通の小説の樣に正面から見るからである。僕思ふに圭さんは現代に必要な人間である。今の青年は皆圭さんを見習ふがよろしい。然らずんば碌さん程悟るがよろしい。今の青年はドッチでもない。カラ駄目だ。生意氣

な許りだ。以上。

左千夫氏來書。――寅彦君の「嵐」は實にうまいものだと感嘆措く能はずといふ次第ぢや。まことに專門文章家顔色無しといふべきである。君は光琳的文章を書かんといふ事を聞いたが、寅彦は光琳以上伊年宗達ぢやと僕は思ふ。寅彦の文の最も氣に入つたところは其沒骨的な無線的な處だ。同じ沒骨無線でも光琳になると旺盛は慥にあるけれど一面に衒氣を隱しおほせない墮落の徵を現はして居る。宗達に至つては富麗にして氣韻があり剛健にして圓熟だ。寅彦の文を其宗達に比したのだから僕の惚れやうは容易でない。

否といふ紫苑交れり萩の中

碧梧桐來信

昨夜當地着(陸中釜石港)明朝汽船にて宮古着翌日馬車行を企て途中一泊の後盛岡着の豫定大方十子日頃なるべし着る物の重いせゐと寒さにあてられたか兩脚股(?)の處に草臥とも無くリウマチともなく一種の痛みを覺ゆきのふも十二里の道を僅に仙人峠を越える二里足らずを歩いたに過ぎず前途甚だ氣づかはし盛岡にて靜養の積り併し例によつて元氣は衰へず安心を乞ふ。

十二日

久しく「一日一信」に接せぬので碧梧桐の起居を案ずる人もあらうから茲に載せる。尙盛岡では内丸十一内田直氏方に滯在する筈。痛みはたいした事で無ければよいが。元氣に任せてあまり無理をせぬやうに望む。

尙「一日一信」は今後何に載るかといふ問合せがあるが多分「日本及日本人」に收むることゝなる筈だ。俳句も同樣だ。

雪車に乘れ溫泉のある里に下る迄

華園健在

或席上、筆まめな華園のたよりがふつと絶えた、是非返事をくれなけりやならぬ筈なのに何の便りも無い、當方からは勿論年始狀も出したのに年始狀すらよ

こさぬ、どうしたのだらう、と一人がいふと、成程さういはれると僕のところにも來ない、僕のところにも來ない、と同じことをいつて、どうても何か出來事があつたのだらう、と皆がいつた。

越えて數日、某處に傳はつた消息によると、華園は昨冬來佐倉宗五郎的代表に立つて約五萬圓ほどの排水工事を決行した、其結果十五日か二十日は入牢する覺悟でかゝつた、有志者からは入牢前の祝宴を開かれた、併し幸に入牢はしなかつた、村民は今現に紀念碑を建てると騒いで居る、との事だ。あの蟷螂のやうに痩せた、小さい聲の、誰にも逆らはぬ、おとなしい、素封家の息子の華園がそんな事をやつたか。

水仙のやうな男と思ひしが

冬の蠅

「日本俳句」を選んで居ると、二三年前の投稿を見る事が多い。さうして時としては物故した人の句稿に逢著する事がある。前回は青楓、彩雲二氏をも數へたが、今回は馬洗、鐵虎二氏を見た。而も共に「冬の蠅」といゝ題に於てゞあつた。孰れもあまり振つた句は無かつたが

木像の膝にとまるや冬の蠅　馬洗

の如き故人の句とすると一種の哀れを覺える。

冬の蠅水仙に飛ぶ書院かな　鐵虎

句中の冬の蠅は常へに在るが作者は已に亡。

冬の蠅ランプの笠に來る夜かな　鐵虎

夜學するランプの傘や冬の蠅　馬洗

殆ど同一の趣向で又平凡の極だ。而もラムプの笠に冬の蠅が來るよりも尙普通な事は人間の死ではあるまいか。さうしてラムプの笠に來る蠅の哀れよりも尙哀れなは二氏が生前「日本」に投じた俳句を今余が見るといふ事ではあるまいか。二氏の句稿を燈下に並べて見て、人生の大事といふのは俳句の上手下手などではない、別に在る、即ちこゝに在る。この目前に在る、と考へる。

目の前に大事あり冬の蠅飛ばず

歌

余は俳句を作るより前に歌を作つてゐた。十六七の頃であつた。學校の國文の先生に見て貰つてゐた。

行く水に影はうつせど蘆田鶴の千代の齡は流れざりけり

といふやうな月並的の歌許りで此歌など先生からほめられた事を覺えて居る。さうして此月並の歌を作つてゐたといふ事が俳句を學ぶのに尠からず邪魔をした。俳句を學び始めてから歌はすつかり止てしまつた。明治三十年であつたか、子規居士が歌の革新を思ひ立つた時分余も席末に加はつて一二首作つた。

其時

佐渡の海荒海越えて佐渡が島に金掘る人をあはれと思ひき

といふ歌を作つた、居士は初五字を「越の海」と直ほして「日本」に出した。愚庵和尙が遙々手紙をよこして新派の歌(子規が唱へた)始まつて以來初めて歌らし

いものを見たといつて讃めてくれた。さうして「思ひき」を「思ほゆ」と直ほしてくれた。乘氣になつて又少し許り作つたが、もう一首もほめられるのが出來ぬので止めた。

此間長塚節氏が來ていろ〳〵歌の話をした。面白かつた、其うちで

宇治川を船渡せをと呼ばへども聞こえざるらし楫の音せぬ

といふ萬葉の歌を讃めたのが耳に留つた。其後何だか歌が作つて見度いやうな氣がする事がある。其氣がする度に此歌を一唱する「聞こえざるらし」が率直で旨いと思ふ。殊に俳句を作りなれた者は此類の措辭を閑却するのてぎく〳〵するのだらうと思ふ。

宇治川は淀瀬無からし網代人舟呼ぶ聲遠近聞ゆ

ちはやぴと宇治川波を清みかも旅行く人の立ちがてにする

「淀瀬無からし」といひ「清みかも」といふ類皆な同工異曲である

木枯に聞こえざるらし窓の人

器用と數寄

兼載雜談に曰。器用を地盤として、數寄を第一とすべし。諸藝准之と。此間能樂に堪能な人の話に、謠でも舞でも皷でも笛でも器用な人て無ければ到底第一流のものになる事は出來ません、併し器用な許りでも困ります、藝に數寄て無ければ續きません。器用な上に數寄てあつたら其こそ鬼に鐵棒ですと。此二說は全然一致して居る。

俳句の方て見ても、器用といふ事は輕視することは出來ぬ。器用な人は兎角輕薄てすぐ小成に安んずるのて却つて不器用な人の方が大成するやうに思はれもするが併しよく見ると其大成する人は決して不器用な人では無い。大才だけに小器用て無いだけの事だ。言を換へれば大きく器用なのだ。

全く不器用な人は如何に數寄でも到底第一流の俳人となる事は出來ぬ。器用は所謂天才だ。器用の人が悉く成功するかといふに、是は又疑問だ。失敗した人のうちにも隨分器用な人があるやうだ。否器用十人のうち九人迄は中途て挫折する。是は數寄が足り無いのだ。數寄にかけたら却つて不器用な方に多い。數寄にない器用より數寄な不器用の方が或點迄成功する。是に於てか不器用も、數寄な器用には到底及ぶことが出來ぬが、數寄て無い器用はよく凌駕することが出來る。第一流の俳人にはなれなくとも第二流の首座に立つ俳人にはなることが出來る。諸藝准之。

踊より海嶺廻しにも器用かな

瀬川

聞まゐらせ候處、此里の火宅を、けふし御はなれいて、凉しき都人御根引の花、めづらしき御新まくら、御浦山しきとは物かは、殊に殿は木、御そもじ樣は土、一陰陽を起し、陽は養にして御一生養といふ字の卦、萬人の養育萬人にかしづかるゝと、賴もしくもめで度御中と、ちよつとらないてう、穴賢、

てう雛樣御もとへ

瀬川

松瀬 ゟ

めいわく

松葉屋の何代目かの瀬川より丁子屋の雛鶴へ遣はしたる文さうな。此時代の遊君今もあらば假りに憂身をやつすも面白からう。

二代目瀬川

敵と知れてうくるる盃

歌浦と札のつきたる協差に

めいわく

明和九年の江戸の大火は目黒行人坂の念佛堂とかより出火、其より麻布、赤坂、櫻田門内、和田倉門外、神田橋、昌平橋、池之端、淺草觀音前、千住と延燒

し、一方は本郷丸山臺より白山權現社内、根津、日暮里に及んだ、其他日本橋を燒落とし兩國橋手前に及んだ分岐線もある。念佛堂の線香の火(?)が殆んど大江戸を燒いてしまつた觀がある。

同年は右大火の後大風大雨の厄も屢〻あつたので、「明和九」は「迷惑」と和音相通ず、年號の難陳かゝる例多し、といふことになり、冬になつて安永と改元したのさうな。

安永、天明は俳句のみならず文藝の活復した時代である。山を燒いたあとに蕨が生え、野を燒いたあとに土筆が生えるやうに、右江戸の大火のあとに頭のさきの少し焦げた文藝がニョキ〳〵と生え出したのかも知れぬ。

昨年の丙午の火事ばやりもやがて頭の尖きの焦げたのがボッ〳〵出掛けて來るといふ段取りなら腹も立つまい。

めいわく

「鎌倉の記」

澤庵和尚鎌倉の記のうちに面白き事二つあり。其一は

瑞鹿山圓覺寺は時頼弘長三年に建立し玉ふ。其の時大覺禪師、時頼遊山の次いで、禪師がいはく、此地は叢林相應の所なり、建立有べしと。時頼時節をうつすべからずとて、折節田がへし居たる耕夫の鋤をとりて時頼一下し玉ふ。同大覺鋤を取て一下し玉ひ、其處に草庵を結びそめ玉ふ云々。

建長寺を出て春光を浴びながら大覺と時頼とが散歩して居る。大覺何心無くうしろの山を見上げながら「この邊寺建てるよろしいあります」とかいふと、時頼直ちに傍に在る百姓の鋤を取つて土地に下し草分けのじるしとする。大覺もつゞいて鋤を下す。こんな茶話半分に出來たものが今の大伽藍圓覺寺だと思ふと面白い。其二は

左に深き谷あり覺園寺といふ。律家有り。實に古跡なり。尊氏將軍の再興し玉ふより此の方の寺なり。むねの札にたしかに見えたり。今の世の工の造りたるに違ひ見所多し。長老坊の造りなど外にはいまだ見ぬさまなり。月中行事の順簿有り叮嚀なり。むかしはさて今は定て十が二三も勤めはあらじと思ふ。八十の老僧一兩人打眠て、壁に寄かゝりたる有樣。いづくにたとへむ閑さ共覺えず。いさゝかも世中をば知らぬ顔なり。心に任せなば爰に留りて生を送らまほしとぞ思ふ。捨ぬる身さへ心の儘にならぬ事なり。

八十の老僧が二人程壁にもたれて居眠りをして居るのは面白い。これは餘程澤

庵の氣に入つたと見えて別に詩がある。

覺園律寺尊氏將軍再興有棟銘

覺園律寺日苔生　木葉鳴風布蓬色　八十五僧不言戒　唯依床壁睡爲榮

能樂雜記

初めて能を見た人は仕手方だけが面を附けてゐて脇師の素面てゐるのがをかしいといふ。能を見なれたものゝ眼から見ると脇師が面を附けたら馬鹿囃子になるであらうと思はれる。

初めて能を見た人は囃子方や地謠の頭がまち〳〵なのがをかしいといふ。はげて居る方はまだよいがコスメチックて綺麗に分けたのなどは鼓や太鼓と調和せぬといふ。是は尤もだ。維新前悉くチョン髷であつた時は此の批難は無かつたらう。いつそ士烏帽子でも著たらよからうと思ふ。社祢に士烏帽子はをかしいといふ人があるが、コスメチックよりはたしかに調和する。

能が退屈だといふ人があるが、其は專門的智識が無いからだ。西洋の音樂でも多少自分でやつて見ねば面白味はわからん。三味線でもさうだ。能でも謠か鼓を少し自分でやつたら退屈どころぢやない、其平生退屈と思つたところが却つて面白味の深い處になる。其上舞の手でも覺えたら目と耳とが油斷する隙が無くなつてしまふわけだ。

血統や風俗や趣味の異なつて居る西洋音樂の面白味より我等の祖先が造つてさうして樂んだ能樂などの面白味の方が早くわからなけりやならん筈だ。西洋音

樂の方はわからいてもわかつた顔がして見度く。日本音樂の方はわからいてもかまはんやうな顔をしてゐるのは不見識だ。

これは能ばかりに限つた事では無いが、能を見る度にいつでも思ふのは、三間四方の空間の上に曲線を描いて舞を舞ひ、一時間許りの時間の中に分を刻んで皷をうち、其が旨く出來たとかまづかつたとかいつて興ずる。舞も拍子も古人が勝手に作つたものだ。空間の上に線を描き時間の上に點を記して、此線の上を歩め此の點の上を打てと勝手に定めたものだ。後人は其線の上、點の上を一分も間違はぬやうにと終生の事業にして困苦して居る。馬鹿氣てゐるといへば隨分馬鹿氣てゐる。併しながら其も考へやうだ。舞も拍子も古人が勝手に作つたものでは無い。日月星辰の運行同樣自然に定まつて居る或物を古人は發見して子孫に殘して呉れたものだ。空間の上の線も時間の上の點も人爲のものでは無い自然のものだ。樂師が其れを習熟して一生を終るのは理學者か引力を研究して一生を終るのも同じ事だ。さう考へると、馬鹿氣てゐるどころか面白い貴とい仕事だ。

鳴子田に石油罐をにくみけり

劍と皷

或古老の話に、昔し弓町に住んでゐた人は知つて居る筈だが、寒中の眞夜中ふと目を覺まして見ると、ヤツトウと掛聲して劍を使ふらしき聲が遠方で聞こえると、又一方ではヤーハーと掛聲して大皷をチョーンと鳴らす音が響く。共に

精神が籠つてゐて聞くものは肝を消すやうであつた。これは劍術の達人淺利某と大鼓の名人葛野九郎兵衛とが寒稽古の獨り打ちであつたさうだ。能樂は武藝より出た音樂であるところから其一呼一吸に武士が戰場に立つた時の心持がある。寒夜人靜まつて後ち座敷の中央に端座し心を定め氣を鎮めて大鼓を打つ精神は、即て刀を取てヤットウと打込む精神である。兩氏の掛聲が東西相應じて寒夜に人耳を澄ましたのも偶然では無い。ヤットウと打込む精神は已に日露戰爭に新たらしい形を具へて現はれた。ヤーハーチョンと打込む精神は如何なる形を具へて文藝界に現はれ來るであらうか。

破芭蕉地下に玉卷く心かな

階級に非ず

或音樂通の博士の話に、ケーベル氏のピアノの如きも我國人は大變なものゝやうに思ふて居るが、其實能樂界に於ける古市公威氏位のものだと。予は此の話を聞いてナール程と合點がいつた。西洋の文藝に心醉した人は往々にして西洋の文藝家を買被り過ぎる、其も必竟生物識りから起こるとだ。又日本の文藝家も其生物識りの聲に驚かされて自ら卑しくする傾がある。愚な事だ。彼此文藝の相違は種類の相違だ。階級の相違では無い。此に著眼せぬと大いなる誤解をする。生物識りは兎角ものに階級をつけたがる。これは横樣に配列してある種類を誤つて縱に見るのだ。横に割れてゐる眼を縱にするのだ。横眼はよし、ゆめ

〳〵縱眼を用ふべからず。

石蕗をかし八つ手花もちもしろし

能樂會式能を觀る

靖國神社の能樂堂に能樂會の式能を見て斯ういふ事を思ふた。此能樂會が最も活動して五流聯合の上手をすぐつた能が芝山内の能樂堂に催うされたのは過去の一夢となつた。上手は死んだ、衰へた。余が知つてゐるだけの名人でも、寶生新朔、同金五郎、山本東、石井一齋、津村又喜、森田初太郎、巳野喜松等は皆死んだ。梅若實、觀世鐵之丞は衰へた。寶生九郎は退隱した。昨二日の如きはこ

れがまア堂々たる能樂會の式能である事かや、と心淋しく覺えた。

併しながら感慨は舞臺の上のみに止らぬ。づらりと見處を見渡して見ると、昔しの能樂會の會員であつて上手揃ひの能を見厭きたらしい白髮乃至胡麻鹽の人は今の能樂界の潮流に後るゝと既に三千里の感がある。寶生の能を見に行つても觀世の能を見に行つても、梅若でも喜多でも諸老の霜鬢はあまりお見受け申さぬ、諸氏の胡麻鹽は目に觸れることが少ない。歳月は舞臺の上にも流るゝが如く立つて幾多の名人上手を奪ひ去つたが、同時に能樂會員の上にも矢の如く駛せて幾多の熱心者を墓中に誘ひ、又殘存者の元氣を銷磨した。昨見る處の見處の人々は諸老の御子息か乃至は新たらしく他の能會で養はれた數奇者が切符の都合をして會員代はりに參集した、といふ觀があつた。さうして其の間に諸老の霜鬢、胡麻鹽髮が僅かに點在してゐるに過ぎぬ、といふ觀があつた。斯う

いふうちにも歳月は流れる。斯ういふうちにも名人は衰へる。又斯ういふうちにも能樂會は老いる。世間に能樂會の不活動を責める聲があるが、これは考へやうによれば責めるのが無理かも知れぬ。能樂會は二十年前の名人上手と終始した。能樂會は舞臺の上に尙餘勇ある櫻間伴馬、三須錦吾、寶生九郎、觀世元規、增見仙太郎、一噌要三郎の諸氏と共に形影相憐みつゝあるやうに見える。昨日の式能が是等餘勇ある老樂師によつて重きを爲しながらも、其實、觀世清廉、喜多六平太、金剛鈴之助、梅若萬三郎、野口政吉、寶生新、一噌米次郎、川崎利吉、三須五郎等の諸氏によつて演了された觀があるのは、恰も見處の多部分が靑衫の新時代的見物人で寂寞を救ふたのに相應する者とはいへまいか。併し乍ら昨日の式能は唯一番の「藤戸」によつて重きを失はなかつた。試に其藤戸の重な役者を驗べて見やうならば、シテ櫻間伴馬、ワキ寶生新、太鼓觀世元

規、大鼓川崎利吉、小鼓三須錦吾の顏振れである。寶生、川崎二氏を除けば悉く非新時代の人である。二十年前の舞臺にも斯る事のありけん腕揃ひである。其のお能一番が獨り重きを爲すといふものはどういふわけであらうか。此事實の上には人々によつて種々の感想を伴ふであらう。

僅に三年に一度の式能を催ほす能樂會を不振と責めるのが同情があるのか、前世紀の遺物として止むを得ぬ現象とあきめらるのが同情があるのか、昨日の式能を物足り無いと嘆くのが無理か、藤戸一番でも拾ひものだと喜ぶのが道理か、試に能樂會會員諸彥に問を捧げて見る。

埋火につぎ足す炭を引くは誰そ

能樂の新鑑賞家

能樂の見物人は此の三四年に急遽の轉變をした。能樂なるものが世間の注意を牽くやうになつたのも此の三四年であれば、見物人の種類に一大變化を起しつゝあるのも此の三四年だ。

昨日もいつたやうに、明治維新の能樂全盛時代はもう二昔しだ。岩倉具視公が率先せられて斯道の維持を思ひ立たれた其花の咲き廣がつた時代は已に遠く過ぎ去つた。今日の能樂界は僅かに一二の名花を樹頭に殘して居る暮れ行く春の名殘である。併し乍ら見物人の中には二十年前に見ることの出來ぬ一現象が見えそめた。

昔しの見物人は樂師崇拜者であつた。やれ九郎がどうした、實がどういつた、新朔がどうだ、一齋がどうだと、其一言一行が金科玉條と持てはやされて、左なき事まで尾に鰭がついて喧傳せられたらしい。爰に於てか彼等が能を觀るのは觀るので無くて醉ふのであつた。批判力は固よりの事能樂の趣味其ものすらわかつてゐたかどうだか怪しいものであつた。其證據には彼等の能に於ける智識は僅に素謠を唸る位の事に過ぎなかつた。彼等が感動するのは謠の一部分に止まつて居た。一旦囃子の點に立入ると彼等は婦女子が俗曲を味ふよりも愚昧であつた。耳に屬する部分には尙多少の嗜好を有したものも、一旦目に愬ふる方になると愈ゝ出てゝ愈ゝ無智に甘んじてゐた。舞を習つた人は多少ありもしたらうが、其舞の妙味は彼等の解釋する能はざる處であつた。まして面、衣裳、作り物をはじめ舞臺の上の色彩、配置等になつては問題にならなかつた。尙著しい

證據は、彼等は其自己が素謠を習つた流義より以外の流義の趣味は寸毫をも解せなかつたことである。寶生流の謠を習つたものは觀世流の謠は勿論の事、其型も拍子も、面も、衣裳も悉く邪道としてしまつた。觀世流の謠を習つたものも同樣であつた。金春、金剛、喜多悉く然りであつた。彼等は唯我佛尊としの生臭坊主主義で、趣味の上には少しも開發さるゝ處が無つた。斯かる能數奇(?)能通(?)は獨り二十年の昔許りで無く、實に今日迄續いて來て居る。現に一昨日の式能などにも堅寶生(堅法華の類と知るべし)は唯最後の須磨源氏(寶生流だけ)を見に來る。堅觀世は草紙洗(觀世流)を見たら歸つて了ふ。共に名人櫻間伴馬(金春流)の藤戸の妙技は解するとが出來ぬ。又解さうともせぬ。然りかゝる能數奇(?)能通(?)はたとへ濱の眞砂子の盡くる時無いにしても、今日に至つて別に一種の新たらしい見物人を見るやうになつたことは洵に快哉

を呼ぶに足る。新らしい見物人とは何ぞや。曰く、流義に偏せず唯一意能樂の趣味に立脚せる人。曰く、耳學問、知つたか振りに甘んぜず、親しく素謠以上の藝を習熟して、一管一皷、一進一退の微細なる點まで研究を積んだ上の數奇者たらん事を志す人。さうして是等は多く新智識を有せる文學者、美術家、學者等にして、殊に學生のうちに其傾向の著しいといふ事は日にまさ〳〵衰運に向ひつゝある能樂界の爲に一點の曙光といつてよい。樂師は凋落し墮落する。併し其責は樂師に歸するよりも寧ろ酷薄なりし時世と文盲なりし能數奇に歸せねばならぬ。若し今後の時世が一點の溫味を以て此藝術を懷に溫むる餘裕があつてさうして忠實なる新鑑賞家が之を激勵し補翼していつたならば或は斯道の復活を庶幾せられるかも知れぬ。能樂の運命も今や一髮に繫つて居る。一刻の油斷をも許さぬ。志あるの士は一分一秒を爭ふて此美術殿を既倒に支へねばな

らぬ。頼みある新鑑賞家を見るにつけて殊に切望の情に堪へぬのある。

埋火につぎ足す炭を引くは汝

能樂倶樂部別會

能樂倶樂部の演能會は一年を經過して本月は別會を十三日(日曜)正午より靖國神社能樂堂に於て開催することになつた。

各流聯合の能は近來殆ど見ることが出來ず僅に三年に一度の能樂會の式能を俟つ許りであつたが、此能樂倶樂部の演能會が出來てから殆ど毎回之を見ることが出來るやうになつたのは悦ばしき次第である。寶生流は寶生會に立籠り、觀

世流は觀世會に立籠り、梅若は梅若の舞臺、喜多は喜多の舞臺に立籠り、見物も亦各一座に限られて他流の妙味は更に之を賞味することをせなんだ。各流には獨り藝の風格の上のみならず其型のみに就て見ても他の模倣を許さぬ長處がある。之を一堂に會せしめるといふ事は演者に取つて有利。觀者に取つて有趣味な事ではあるまいか。

近時何の流にも偏せず單に能樂の趣味を味ふ人＝正當なる能樂鑑賞家＝が增加したのは著しい現象である。此種の人は能樂倶樂部の演能會に俟つ所が多く。能樂倶樂部の演能會は此種の人に俟つ所が多い。殊に其乏しき時間を割いて簡易なる方法にて觀能せんとする學生諸子は此能樂倶樂部の演能樂會に俟つ所が多く、能樂各流の維持を目的とせる能樂倶樂部は未だ偏派なる流義になづまず唯公正なる趣味に立脚せんとせる學生諸子に俟つ所が多い。

十三日の別會は、櫻間伴馬の國栖、喜多六平太の道成寺、觀世清之の安宅の三番よりなる。道成寺安宅の二番は芝居にも作り替へてある如く派手なものだ。素人の眼にも面白く見える。國栖は之に反して澁いものだ。老手を俟たねばならぬ。幸ひに名人櫻間伴馬が之を演ずる。同日の別會をして重きを爲さしむるものは道成寺に非ず安宅に非ず却て此の國栖に在る。

裝束著て涕うちかめり國栖の仕手

能樂倶樂部別會寸評

見處に岩倉、細川、土方、津輕、井伊、內藤等の諸華族を見るのは別に不思議で

も無い、三島、久米、大槻、松井、坪內、夏目、芳賀、姉崎、岩谷諸氏を見るのを此演能會の特色とする。其他觀世流の本でも無く寶生流の本でも無く、謠曲通解を携へて見て居る學者學生等の多かりしも亦た獨り此演能會の特色とするに足る。ひたすら其趣味にあこがれ陶然として醉ひ樂しめるまことの見物人は、生かぢりの謠をたよりに、能を見るので無く唯謠を聞きに行く人よりは、眞正の能樂愛好者として尊重すべきである。而して此種の見物人が尠くとも其三分の一を占めるのは此演能會の誇りとする處である。櫻間伴馬氏の「國栖」は止むことと得ざる所用の爲め其前半を見落とした。「岩ぎる水に放せば」のところ定めて面白かったらうと人に聞くと、扇をあげて鮎を急流に放つ動作、鮎の水をきつて早瀨を泳ぐのを面を使つて目送する動作、天下一品であつたと其人は涙をこぼす。此人は流義に屬する人で無い。寶生流の人に聞く。旨いもので

あつたといふ。觀世流の人に聞く。たまらぬ面白さであつたといふ。名人の技はこゝに於てか流派の上に超絶して居るものと感服する。余は中入より見る。

「あの谷々峯々より出合ひて彼狼藉人を討留候へ〳〵」の處を見て責めてもの慰藉とした。

喜多六平太氏の「道成寺」は美しかつた。鐘入りは殊に見事であつた。今迄見來つた幾多の「道成寺」中で最も見榮えのした鐘入りであつた。これは鐘引金子龜五郎氏の功多きに居る。ワキは寶生新氏病氣の爲め野口貢五郎氏の代勤であつたが役目を耻かしめぬ出來であつた。

觀世清之氏の「安宅」サラ〳〵としたうちにも相當に重味のある藝風、面白く見られた。「實やくれなゐは園生に植ても隱れなし」の處は物足らず、珍らしく勸進帳の小書きつきなかりし爲め連との連吟はよほど苦しかつた事と想像する。

ワキの東條照映氏は氣がかゝつてゐて而も厭味の無き點斯ういふものをやらしては新氏以上との評をも聞いた。

狂言は山本東次郎氏、岡田紫男氏休みの爲め長命翁を相手に殆ど休みなしの骨折りはさぞと想像した。

笛方も寒がり坐る樂屋かな

辻能

「翁草」に

近頃にも能太夫橋本權之進友人と伴ひ、堀井千助が辻能を見物す、其日道成

寺を致せしを、いかにも感心の體にて見居たりければ、友人曰、辻能抔は、畢竟心を留る物に非ず、誠に其形に似たる事をして、間を合して置く物なり、増て道成寺などは、笑種計の事なるに、いかに左樣に見給ふぞと尋れば、實々さに非ず、千助が道成寺今日初て見るに、感心云ふ計無し、今口をきく太夫に是程道成寺を舞ふ人は覺えず。尤も其形はわけもなき事にしてからが、一體道成寺我物に成てあるなり、餘の物をする心も、道成寺も同じ心にて勤るゆゑ、自ら道成寺くつろひで面白し、理り哉、爰彼こにて、道成寺の場數千助ほどのもの他に有まじ、いか程上手にても、場數少なき故、あれほどくつろはずと云て、寔に感心して見物しけるは、流石權之進と云はるゝ太夫程有と、人々稱せしとぞ、

とある。此辻能とあるは所謂照葉狂言の前身てる。休み無しに諸國を興行してまはるばかりか、道成寺の如く素人目に花やかな者は却つて屢〻演ぜられた事てあらうから、重き習ひ者といふ屆托などは更に無く、熟練の極、輕々と舞ひこなしたものであらう。能樂、歌舞伎の如き型を墨守する藝術は、先づ正格に其型を習得し、次には一回にても半回にても練習の度を重ねるといふ事が何よりの大事だ。千助の如き前者の方には如何はしい處もあつたらうが、後者の方には慥かに太夫も及ばぬ功を積んだものであつたらう。橋本が其點に著眼したのは藝術家としては當然の事て別に感服するにも當らぬが、辻能風情と頭から輕蔑し去らなかつた處に雅量を認める事が出來る。

熊谷今すみて佛師はじまる
釣鐘を据うれば狹き鏡の間

幕引に若かず

此間伊井一座が歌舞伎座で大入を取つたといふ事は壯士芝居が如何に社會的位置を得たかといふ一の證左になつた。たしかに壯士芝居、(といふ古風な名ももう通用しさうも無い)所謂新劇は少し見ぬ間に何等かの進歩をする。歌舞伎、即ち舊劇が少し見ぬ間に何等かの損失(老優の死去型の破壞等)を爲しつゝあるのに比べると雲泥の差だ。大きくいへば德川藝術の滅亡と明治藝術の興隆を意味するともいへやう。併し乍ら其伊井一座が「兩浦島」を演ずるのを見ては毎度の事だが壯士役者の非藝術なのに匙を投げざるを得ぬ。あの體とせりふをもてあつかつてゐるざまは何といふ事だ。斯ういふ型を重んずべき藝術になると、伊井、河合先生以下の名優達は幕引の一老爺に若かぬといつてよい。幕引が小走りに走り乍ら幕を引く形の整つてゐる事は伊井の浦島よりも數十等の上位に在るといつてよい。併し乍ら一旦「サツフォー」になると、寫實的の妙味は役々の上に認められる。殊に河合の如きは創意ある科白に充分人を牽く力がある。手紙を書く一段の工夫の如きは迚も舊俳優などの思ひ及ばぬところだ。新俳優は何處迄も此の道を歩まねば僞だ。「兩浦島」の如きは能樂師若くは歌舞伎役者の發展し變形したものを俟たねばならぬ。

尾上松助

鹿を射る鎌を雁に磨ぐ勿れ

尾上松助の上手といふ事には誰も異論は無いやうだが、其藝の品位に就ては反對した二説がある。一つは松助の藝は下品だといふ説で、これは大名は固より武士になつても品格がない、大工だとか鳶とかいふものになつて初めて眞に迫る、これは松助の藝が下品だからといふのだ。他の一つは其大工だとか鳶とかになつた處を見ると老熟て、かれて、藝に錆が出來て、何ともいへぬ味がある、そこが藝の品位だ、松助の藝は高尚だといふのだ。

お役人が高尚で町人が下品であつたのは昔の事だ。お役人のうちに高尚なのもあれば下品なのもあり、商人のうちに高尚なのもあれば下品なのもある。

松助の藝は高尚だ。

俳句でも材料の高尚なのが高尚な俳句と心得るのは見識が低い。下品な材料をも高尚な俳句に仕立て上げることが出來る。八百藏の武士よりも寧ろ松助の町人といつた俳句が欲しい。

ついと飛ぶ赤蜻蛉の町人が

紙治

雁次郎の紙治を觀る。「天滿に年經る千早ふる神にはあらぬ紙屋とて」といふ床の淨瑠璃に連ての花道の出は「魂ぬけてとぼ〳〵うか〳〵」といふ心持充分にて其上藝に品もあり幅もあり、感服した。併し面白かつたのは前半だ。後半になると淨瑠璃にない挿文句澤山にて卑近なる寫實に落ち、其がまた小氣が利き過ぎてしちくどく、大阪役者の臭味を遺憾無く發揮した。さうして其處が見物に

どつと受けて居るので厭やになつた。近松の文句には「ゆシ同じ死るといふて も首縊るのと自害するのと何方が苦しうございます」の如き力の這入つた洗錬された白が多い、さういふ文句に「にいさん、まあ何しなはるぞいなあ」といふが如き役者が日常使ふやうな平凡極まつた駄文句を挿むといふ事は、常識から考へても不調和なる事は知れさうなものだ。殊に淨瑠璃は或型にはまつた、篩にかけられた文字だ。其に型にはまらぬ、出鱈目の文句をまぜるのは不心得千萬だ。これは雁次郎許りに責めるわけには行かぬ。已に先人からの不量見ではあらうが、可成茲に意を留めて、其過ちを少くし度いものだ。いくら紙治の性質がよく描かれても、科白の上にかゝる不調和があつては見るに堪へぬ。

猿之助の孫右衛門、八百藏の太兵衛、松助の善六など皆面白いが其大阪言葉は甚だ窮屈で氣の毒だつた。梅幸の小春は無難のやうだが、お三の手紙を受取る

處の表情からしてが物足らぬ。

元祿の松露に交る小石かな

引窓に紙治

歌舞伎座の「引窓」が評判がよいが、あれは引窓といふ感じのまい材料を使つて、「まだ日が高い」とくわらりと明けるといふやうな際どい動作や、「兩腰させば十兵衛丸腰なれば今迄どほりの南與兵衛」といふやうな際どい臺詞を使つた處に面白味があるので、俳句にたとへると、派手な材料を用ゐ、屈折の多い調子を使つた、所謂骨立した面白味の句に類する。

「紙治」の方になると、流石に近松の作て、面白い文句も「引窓」ほど際どくない。何處と取出す程の文句て無くとも前後の關係から善く味つて居ると、ぢつと腹の底に浸むやうな面白味だ、俳句にたとへると、所謂力の內部に籠つた沒骨的の句に類するてあらう。

さりながら新酒あれば乞古酒もある

俠艶錄

紅綠の「俠艶錄」といふ脚本が本鄕座て演ぜられて好人氣だ。場面賑かでをかしみが多くて時々しめつぽい處もあるので誰も厭かずに見る事が出來る。殊に役者に當篏めて書いたのが手柄だ。

三幕目迄は見落とした。其以下ては、女優力枝が按摩德市を捕へて、「ねえ德市さん、お前は私しの氣質を知つてゐておくれだらうが」云々と述懷する所自然にてよく、大切の按摩と狂女との立廻り飄逸にてよし。理窟て考へたら合點の行かぬ處だらけなれど、そんな事に頓着せぬのが此芝居の取柄てあらう。

喜多村の力枝、高田の按摩等好評。但し「重の井子別」の喜多村は物にならず、靑木の彌惣左衛門、高田亘の三吉はよし。

雀蛤となつて見せたる芝居かな

文藝協會の芝居

十日歌舞伎座に文藝協會の芝居を看、十一日靖國神社能樂堂に賓生會の別會能を觀るといふと大變だが、十日も遲くから拜見し、十一日も鉢の木と正尊を見たゞけである。併し昨日歌舞伎座の常闇の醉へる神々達の踊を見た目で、今日松本金太郎氏の鉢の木の杜手を見た時は妙な心持がした。松本氏の力の入つた藝といふ事は平生から知つて居る、然し斯く迄力が入つて藝に幅があらうとは今迄氣がつかなかつた。醉へる神々達の手の先足の先で踊つて御坐つたのが目に殘つてゐたせゐでゞもあちらか。手力男尊が松の枯木をひつこ抜かれたのはえらい事であつたが、鉢の木の梅の枝や松の枝を伐る方が十倍も百倍も力が入つて見えた。其からすぐ連想は桐一葉に飛ぶ。重成が馬の手綱を兩方の手でヒョイと引いたのが目に浮ぶ。且元が馬からヒョコと飛下りたのが目に浮ぶ、鉢の木の「うてどもあれほども足弱車の」の處の唯鞭を上げてうつだけの科の堂々とし

てゐるのが有難く見られる。正尊の「大將討せて叶はじと、急ぎ馬より飛て下り」と姉輪平次が馬から下りる動作は唯足を上げて拍子を踏むだけだが、其だけで勇士としての重みが見られるのを快とする。

藝の重みとか幅とか品位とかいふ事は心持だけで出來るものでは無い、稽古、習練、工夫等から得なければならぬ。工夫も頭許りでは行かぬ。科、白共に長い歳月の間習熟しなければ技藝といふべき點に迄進む事は難かしい。十日見たところだけでは唯物眞似、道樂といふに過ぎぬ。見物も其心で半分は好奇心半分は義務的に見て居る。眞面目に藝術と許すべき程のものになる迄にはまだ前途が遠い。時藏の瀨尾が揚幕からつか〳〵と出て來て花道にとまる迄の間に藝の力、重み、幅、品格ともいふべきものが遺憾無く發揮される。能の脇師は脇座に座着いてぢつと坐つてゐる處に千鈞の重みがある。一擧手一投足、これが

藝術となると非常な大事件だ。これは學門や寫實的の工夫では行かぬ、手を取つて貰つて先輩から習はなけりや駄目だ、歳月を經て練磨の功を積まなけりや駄目だ。

何千金を投じて三千の客を一夕に集めるのも快は快だがあまり派手すぎて却てうすら淋しい感じがする。願はくは歌舞伎なり能樂なりの師に就いて、科、白の上に根本的の習練を積んだ上、新たらしい工夫をされてはいかが。而も其習練たるや、日課として一日の油斷なかるべく、又生涯を斯道に捧ぐべきは勿論の義として。

眉掃をおいて菊花に對しけり

青葉會

昔し大學の學士學生仲間に「青葉會」といふ會が出來た事があつた。帝國文學が生れた當時て、何ても劇を研究するといふのが目的て、其爲め觀劇會が組織された。亡なつた高山林次郎氏などが旗頭てあつたと記憶する。其の會員の一人(今は某師範學校々長)と會談の節、觀劇會を組織して其て劇の研究をするとは迂遠な話だ、本當に劇を神聖なものと思ふなら諸君が自分で役者になつたら善からう、學士團體の芝居が出來るのも面白からう、といつた處、其學士には面に慍色があつた。其時代の事を考へると、今日の文藝協會や、毎日新聞演劇會などの遣り口は慥かに歩を進めて居る。

此間大學の學生が浪花節を改良する爲め身自ら浪花節語りとなつたといふ事が新聞紙上に傳へられた時、某新聞は之を罵倒して若し浪花節改良に意があるなら、何も自分で遣るには及ばぬ、局外に居て指導誘掖すれば善いといふやうな事をいふてゐた。馬鹿な話だ。局外に居て指導誘掖するなどゝは藝術と云ものに盲目な人のいふ事だ。藝術といふものはそんな容易なものでは無い。充分いへば七八才位より脇目もふらず入りびたつて修業せねば本當のものにはなれぬ。三十代からの修業では到底道樂の域を脱する事は出來ぬ。況や局外などにゐて何がわかるものか。

青葉會時代より今の文藝協會時代になつたのは一轉歩だ、再轉三轉して漸く眞の藝術の士を見るやうになるであらう。

俳人の文章

俳人の文章は簡潔なのが長處で又短處だ。僅か十七字で景色や感情を現はすのが習慣になつてゐるので長い文章を書かねばならぬ時にも矢張り十七字を作る時と同樣の考へで極めて簡短な叙寫をする、さうして此叙寫で自分の感じを充分讀者にも與へ得るやうに思つて居る。これは誤りだ。俳句は元來短詩であるから其一字二字に深い注意を拂ふ、長い文章になると讀者の頭はさう鋭敏で無い、すこしは長く言つて貰はねば充分に刺撃を受ける事は出來ぬ。

又俳人の文章には無駄が少ない、人間の頭はさう働き續けに働ける者で無く刺撃を受け通しに受けられる者では無い。もし受け通しに受けたら刺撃に慣れて

しまつて其は終に刺撃て無くなつてしまふ。警句も同樣だ。警句は偶〻あるから警句でのべつにあつたら警句の性質を亡失する。俳人の文章は警句に富んでよく締つて居る。然し乍ら無駄が少くてゆとりが無い。

俳人の小説を見ると短篇が多くて長篇が少ない。これは思想の上にも原因せうが右の筆癖にも由來する。長篇を書かうと思へば是非此點に意を致さねばなるまい。夏目漱石氏は獨り此弊を免れて居る。氏は或景色、或感情を叙するに極力筆を費して遺漏無き事を旨とする。氏に比較的長篇あるのはこれが爲めである。唯警句疊出が稍〻ともすれば累を爲すかと思はれる。

寫生文の起りしわけ

或人は寫生文なるものはどういふ動機で起つたのかと聞く。曰く。明治三十年頃の文學が西洋思想の流れ込んで來た結果あまり理窟つぽくなつて、智識に訴へる部分の思想には取るべきところのあるものも、其外形として描かれる客觀の描寫があまりぞんざいで不自然であるので、其に慊たらず覺えたのが一つ、西洋思想に離れて立つ側の作家は又戯作者流の系統を離れることが出來ず、趣味が凡て俗情的で超脱した風情に乏しいのを賤しとして退けたのが一つ、前者の結果は西洋畫家がスケッチに年月を費しデッサンに地盤を築くに倣ひ客觀の寫生といふことに意を留むることとなり、後者の結果は俗情を離れて立つ俳句趣味を俳句以外の散文にも擴張して皷吹することゝなつた。趣味は俳句趣味に立脚し、描寫の方法は繪畫及び俳句(俳句も此の時繪畫的に寫生を生命としてゐた)の技術を應用して客觀の忠實な寫生を試むる、これが即ち寫生文の立脚地であ

つた。

其後寫生文は幾變遷したが、今日に至るまで趣味に於て俳句趣味、技術に於て寫生といふ事は一貫して變る處は無い。

變ることなきを頼みの岡見かな

俳句と寫生文

（一）

俳句の復興は明治廿三四年をはじめとする。今日迄に約十五年の歳月を閲して居る。寫生文といふものゝ起原は明治三十一年頃だ。今日迄約十年の歳月を閲

して居る。小説が明治十八年頃を起原とし新演劇が二十四五年を創設時代とすると先づ兄弟のうちにあるといつてよい。扨て其俳句と寫生文との關係に就て一二言を費さう。

俳句の唱道者が子規居士であつたやうに寫生文の唱道者も子規居士であつた。併し乍ら俳句の方は子規居士在世の間に略ゝ荒方の仕事は出來上つたが、寫生文の方は端緒を見出したのに過ぎなかつた。子規居士の識見も俳句に對しては大量で、諸種の句の特色を其々闡明し一々歸著する處を指定した爲め皆自己の長所に向つて猛進する自信を起こさしめた。其爲め俳運一時に起つて百花が時を同うして咲く偉觀があつた。居士一度去つて後は或一方面〳〵には其々發達もし作者のうちに目ぼしい者も出るが俳句界全體からいふと其發達は左手右足等のみの發達で決して全身體が健康狀態にあるといふ事は出來ん。俳句界は居

士在世の時が一番花も多く且つ實も多いやうな感じがする。其に反し寫生文の方になると居士の識見はあまり廣くなかつた。或一說を堅く主張して其に鋭意であつた爲め他を顧る暇がなかつた。故に其說に恰も適應する才能の人は得る處が多かつたが、稍〻異る傾向を持つて居つた人は茫然として自失するといふ有樣であつた。之を居士が俳句に於ける多種多樣を容れて各〻其處を得せしめたのに較べると大なる差といはねばならぬ。居士の歿後あまり花やかでもないが又あまりさびれもせず同人の間に研究された今日の寫生文は獨り一方面に進歩のあとを止むる許りで無く、又横樣に境界を廣げて多樣の識見を容るゝやうになつた。居士歿後の俳句界と寫生文界とは傾向を異にして居る。併しながら斯ういふ事は事實だ。子規居士の議論は俳句と寫生文との間に著しい廣狹の差があつたが、其作品に就て見ると必ずしもさうて無い。居士の俳句は隨分多樣

だが併し其識見ほど多樣ては無い。其識見は其作品よりもより多く多樣であつた。居士の寫生文は左程多種で無い。併し其議論ほど形の變化しないもてては無かつた。其作品は其議論よりも宏量であつた。若し居士にして今數年の餘名があつたら、今日などは寫生文界にも亦縱横の奔馬を容れて高い處て鞭を取つて居るであらう。

唐辛子赤く棉白し粟の後

（二）

俳句を作つた事のない人の寫生文はどうしても俳趣味が乏しい。其爲め寫生文としての價値も少ないやうに思はれる。俳句といふ短詩が人に吹込む趣味は早くして鋭い。少しても俳句を作つたものと全く俳句を作らぬものとは文章の趣味の上に已に著しい差を生ずる。

俳句に熱心な人は多いが寫生文に熱心な人は少ない。俳句は殊に手つ取り早く出來るから誰でも思ひつきやすいが、寫生文の方は少し長いので其れだけ人が思ひつきにくい。思ひついても出來にくいから、やりかけて止める。

俳句に熱心な人は往々寫生文を作るものを俳句の外道のやうに心得る。量見の狹い話しだ。俳句の形は十七字だが俳句趣味は無邊際だ。之を文章の上に及ぼして寫生文となすものに何の外道な事があらう。俳句趣味を人に傳へる爲めには俳句でもよい、寫生文でもよい、小說でもよい、戲曲でもよい、繪畫でもよい。でもよいどころか、斯る諸體の文藝に悉く俳趣味を普及することが出來たら俳人の立場として大に快哉を呼ばねばならぬ事だらう。俳句許り作つて寫生文を作らぬのも一見識だ、俳句も作り寫生文も作り小說も作るのも一見識だ。自家の立場を知るのはよい。他の立場を知らぬのは見苦しい。

稻苅りに芋掘る事を叱りけり

（三）

俳句に主觀派と客觀派とがあるやうに寫生文にも主觀派と客觀派とがある。併しながら玆に注意すべき事は、其主觀派といふものも俳句若くは寫生文のうちに於ける主觀派で、文學全體から見たら客觀派の一部分に收められてしまふ事である。和歌と俳句とを較べると和歌は概して主觀詩で俳句は概して客觀詩である。其客觀詩中の主觀派は主觀詩中の客觀派よりもより多く客觀的な事が多い。くだけていへば和歌で景色などを叙するにも概ね情を寓する。俳句では情を述べるにも景色を借りる。此點は和歌に對して俳句の著しい特色である。

寫生文も亦俳句同樣の傾向を持つてゐて、目に見耳に聞くものを其名の如く寫生するのが目的であるから、いかに熱情を持つて書いた主觀派のものでも、こ

れを廣い文學全體からいつたら叙情的の文字といふ事は出來まい。文學の或種類には理窟的の主張を現はす爲めに美的分子を借り來るものがある。寫生文になるとたとへ主觀派の作でも人事及び景色を寫す必要上主觀を按排するに過ぎぬ。丁度俳句のうちの主觀句と見るべきものが其實十分の六位迄客觀の容量で埋まつて居るやうに、寫生文のうちの主觀的文章と見るべきものも其實十分の六位迄客觀の容量で埋まつて居る。爰に於て斯ういふ結論に達する。俳句及び寫生文の作家は其傾向の如何に拘らず是非共客觀を忠實に研究し描寫する必要がある。此點が文界に立つて一見他と識別さるゝ第一の主要點である。同時に俳句と寫生文とが兄弟文學たる處である。

草むらに蝗の色を見わけゝり

（四）

熱情家でなけりや詩人になれぬ事は無い。冷靜な頭腦を持つて居る學者的の人、若くは何事にもまけず嫌ひな力行家などでも詩人になれぬ事は無い。併し乍ら文藝に志す人は熱情家が多い。熱情家が主として詩人美術家となる。

扨て俳句若くは寫生文は文學中に在つて熱情的のもので無い。非熱情文學だ。俳句趣味といふのは非熱情趣味だ。然らば熱情的の人は俳句若くは寫生文に適せぬから他の文體を擇んだ方が善からうか。これは屢〻他人の質問によつて念頭を往來した考へだ。其結果として次のやうな數條の答を作つて見る。

一、俳句趣味は熱情趣味では無い。併しながら熱情趣味と一衣帶水を隔つれば存立する趣味である。熱情の人若し俳句を作り寫生文を作らんとならば乳より下に熱火を收め、乳より上に冷水を盛り而して後に外界を見ればよい。非熱情の人が乳の上下共に微溫湯を湛へて俳句若くは文章を作る時に、熱情の人は乳よ

り下の熱火に溫められたる乳より上の微溫湯で俳句若くは文章を作ればよい。

一、或は疑ふ、俳句趣味とは非熱情趣味では無く所謂熱情の大地を隔つるに一衣帶水を以てしたる趣味では無からうか。

一、否、俳句に二個の境地がある。一は先天的微溫境。他は後天的微溫境。(熱情の大地を隔つるに一衣帶水を以てしたる境)

一、先天的微溫境の住人は好んで俳句及び寫生文に遊び、而して或は學者となり、實務家とならうとする。後天的微溫境の住人は好んで俳句及び寫生文に遊び、而して或は小說家となり、空想家とならうとする。前者は概ね主義の人、後者は概ね趣味の人。

一、俳句及び寫生文は此二個の境地を有して居る。爰に於てか、文學者非文學者を問はず何人も指を染めることが出來る。詩人らしさ人も俳句を作る、詩人らしからざる人も寫生文を作る、常識の人も作る。狂に近い人も作る。

一、熱情家で無けりや詩人になれぬ、といふ說を最もよく破るものは俳句だ。又熱情許りでも趣味が不足するといふ事を最もよく說明するものも俳句だ。寫生文之に同じ。

葦の咲く水の廣さを測らばや

(五)

俳句及寫生文を作る情の狀態は微溫的だ。而して其結果は寫生だ。微溫的情緒動いて山川草木及び人間の景色に近い動作感情を捕へて句を作る、其捕へる刹那に寫生的の技術を遺憾なく用ゐんとする。此寫生といふ事が俳句及び寫生文を作るものゝ鮮明なる旗幟だ。

寫生といふと寫眞と混ずる。爰に於て寫生を喜ぶ事俳人一派の如くならざる人

は、俳人一派の寫生といふものを寫眞と同樣に見て輕蔑する。これは誤りだ。寫生を研究するものは、如何に實際通り寫すかといふ事を研究すると同時に、如何に實際を添削したらば實際通りの景色若くは感情が描かれるかといふ事を研究する。顏を蠟形の中に突込んで拵へた像は實物と少しも似ぬといふこと、鯉の鱗を數へて書いた畫は鯉らしくないといふこと等は今更めかしていふ迄もあるまい。要は智識的に實際と變らぬのが目的では無い、感情的に實際らしく見えるのが目的だ。感情的に實際らしく見える爲には實際を或點迄添削する必要がある。寫生するものゝ苦心は透徹なる觀察と此添削との二つに在る。可成添削を少くするのも一派の寫生だが、可成添削を多くするのも一派の寫生だ。要は智識的の實際を寫生せず感情的の實際を寫生するにある。所詮寫生的文學の目的は學問から得來たる所の陳腐な描寫に慊らず自分自身で

刀を取つて造化の體から新らしい一片の肉を得來たらうとするのである。又實際を研究せぬば幾ら想像の強い頭でも思ひ及ばぬ新たらしい物及び事を見出して一篇の文章に睛を點ぜうといふのである。

俳句と小說

(一)

俳句は趣味のみに立脚した文學だ。趣味以外の事は加味する必要は無い。併し世間で受けるのは趣味許りの俳句では無い。「物いへば唇寒し秋の風」とか「世の中は三日見ぬ間に櫻かな」とか「君が代は二百十日も荒れにけり」とかいふやう

な句だ。斯ういふ句は趣味に立脚せずに理窟に立脚して居る。世間の人は十人が十人理窟の方はわかる。趣味になると特別の修養のある人で無けりやわからぬ。單に趣味に立脚した立派な句が世間では一顧もせられぬ時に前に掲げたやうな理窟つぽい俳句としてはあまり價値の無い句が非常に敬重されて居る。世間の評判は當てにならぬ。

小説も趣味のみに立脚した文學であらうか。趣味以外の事を加味する必要はあるまいか。世間で受ける小説を見ると決して趣味許りのものでは無い。人間の運命とか、社會問題に於ける主張とか、心理の解剖とか、何れも趣味に立脚ずに理窟に立脚して居る。俳句の方は恐る〳〵理窟に立脚したものもあるといふ位に過ぎぬが、小説の方は理窟に立脚せねば小説では御坐らぬぞといふ態度て天下晴れて理窟に立脚して居る。小説が世間の人十人が十人に相當の快味を

以て讀まれるといふのは此爲めだ。殊に其の理窟の骨を包む肉は趣味の豐かな材料であらうがあるまいが、そんな事は俗人には無關係だ。唯骨さへ理窟つぽく出來て居れば滿足するのだ。趣味に立脚する事を以て文學の第一義と心得て居る俳人の目から見ると、世間滔々たる小説は多くは非文學であつて、唯理窟の骨を趣味の肉で充分に包み了せて居る小數の作のみが僅に文學的著作として認定さるゝのだ。

秋の水石の窪みに獨り澄む

（二）

俳句は短い文字であるから長い事はいへぬ。從つて其咏ずる處は景色とか景色に近い人の動作とか色の濃淡で現はすとが出來るやうな簡單な感じとかに過ぎぬ。斯ういふものは簡單なだけに純粹だ。文學の第一義たる趣味のみで他のも

のは交へずとも足りる。小説になると之と違つて、是非とも長く書かねばならぬ必要がある。俳句に咏ずる程の簡單な材料では如何に引延べても小説の一回分をも構成する事は出來ぬ爰に於て趣味以上に他のものを附加する必要がある。爰に於てか人生觀とか社會觀とかに立却するやうになる。

社會觀や人生觀は學問上の問題として獨立することが出來るものだ。文學の皮を被らなければ生存することの出來ぬ趣味とは別種に屬する。趣味は學問では論ずる事は出來ぬ。假令論ずる事が出來ても其は皮相の論を爲すに過ぎぬ。趣味は傳ふべきもので論ずべきもので無い。然るに社會觀人世觀は小説の骨子ともなるが又獨立して智識の範圍内のものとして踏み止まる事も出來る。俳句は純粹の文學の子趣味のみに依て立たうとして居る。其の見地から小説を見ると兎角異分子の交つた沌濁の文學とほか見えぬのである。

併し智識的に頭腦の構成された青年、若くは社會人生の紛糾した有樣に心を留めて居る人などは、簡單な趣味の藥味のみでは兎ても其空腹を充たす事は出來ぬ。彼等の目から見ると俳句の如きものは甚だ力弱いものでもつと力の强い刺撃の强い腹にたまるやうなものが欲しい。小説といふ呼聲は爰に於て起る。彼等の見地から見たら理窟を骨とし趣味を肉とした程のもので無ければ却つて文學として尊重する事は出來ぬ。

然り小説からは終に理窟の異分子を排斥する事は出來まい。其は仕方が無い。唯其上は其理窟の骨を充分に趣味の肉で包み了せねばならぬ。骨がすこしでも外面に現はれては其だけ文學としての價値を減ずる。肉がすこしでも加はれば其だけ文學としての價値を增す。理窟は張り子の達磨を作る竹の骨組みだ。大きな達磨を作る時に是非此竹の骨組みは必要であらう。併し乍ら此竹は何處迄

も骨組みだ。張り子の達磨を作るのが目的なら是非其上を張り固めねばならぬ。此張り固める紙が趣味だ。其上に塗る色が趣味だ。紙を張つて色を塗つて達磨を拵へ上げた時もう竹の骨組みは目に入らぬやうにしなければならぬ。文學上の産物たる小説を作らうといふ人は此没骨的工夫が何より大事だ。没骨の出來上つた小説なら理窟は交つてゐても趣味の刷毛で塗り消されて居る。此時は俳人も目を瞪つて純文學的作品〳〵と叫ぶであらう。

菊細工鉢は隠れて見えざりけり

寫生文と小説

（一）

主として俳人の手によつてなる寫生文といふものは俳句と同じく趣味にのみ立脚する散文である。人世を斯く〳〵の論據より觀察するとか人間の運命をしか〳〵の思想によつて描くとかいふやうな左樣な智的のものでは無い。唯俳句趣味なる一種の趣味より人間の動作を觀察して面白いと思つた事をありのまゝに描く。其描寫の動機にも理窟が無く、其描寫の方法にも理窟は無い。世人は風俗文遷、鵜衣等の俳文と寫生文とを相似た者のやうにいふが、これは却て相違がある。俳文の方は非理窟ながらも兎角理窟をいひたがる。何々なるが故にしかじか、といふ心持を常に離れる事が出來ぬ。俳句でいへば「ものいへば唇寒し」とか「朝顔に釣瓶取られて」とかいふ類のものが多い。「よろ〳〵と撫し子殘る河原かな」とか「湖の水まさりけり五月雨」とかいふやうな純趣味的のものは少い。

寫生文になると全く反對で或簡單な人事を寫生する以外何の理窟も無い。古來俳句が進んで來た道を散文でやつて見やうといふに過ぎぬ。

扨寫生文と小説との關係はどうであらう。俳句を引延べて寫生文にした如く寫生文を引延べて小説にする事が出來るであらうか。これが常に起る疑問だ。併し乍ら前回にいつた如く小説といふものは到底理窟の骨組を拔くことの出來ぬものとすると寫生文とは全然目的を異にしてゐる。寫生文は俳句の如き散文として文界に獨立すべきもので小説とは沒交渉のものらしい。唯併しながら注意すべき事は所謂骨組みの上に張る一枚〳〵の紙は寫生文の如く趣味的のものである。此一枚〳〵の紙の良否によつて小説の出來榮えに非常の差がある。若し理窟の骨ばかりで滿足せずに趣味深い肉をつけた文學的の小説を作爲せうとならば是非とも此一枚〳〵の紙を精選する爲めに寫生文を習熟する必要がある。骨

組みは主として學問や經驗上の智識によつてなる。上張りの紙は是非寫生文によつて得た描寫の技倆に待たねばならぬ。

（二）

一人の男が街を歩るき乍ら或處で後ろを振り向いた、其から五六間歩いて立ちどまつた、唾を吐いた、歩き出した、など、いふ事柄は面白くない。單に外的描寫をする寫生文ではこんなつまらぬ事は排斥して材料とせぬ。併し內的描寫を目的とする小説では時としてこんな事をも材料にする。さうして是等の動作の間に於ける此人の心理的の現象を作者は説明する。初め後ろを振り向いたのは斯ういふ考へをし乍ら振り向いたのだ、立ち止つたのは斯ういふ決心をして吐いたのだ、といふやうに其一つたのだ、唾を吐いたのは斯ういふ心持ちで立ち止動作一動作を常に內的の描寫で補綴し彩色して行く。寫生文と小説とは斯うい

ふ處に大いなる相違がある。相違は是許りては無いが、是も相違の一つである。

山眠ると小説にては申すなり

(三)

小説は哲學で、寫生文は科學のやうなものともいへる。寫生文は實世間の零碎な事實のうちに面白味を見出さうとするのである、丁度科學が世界の零碎な事實のうちに眞理を發見して行くのに類して居る。小説の方は作者の人生に對する主觀に或形を附與して所謂小天地を作り出すのである。丁度哲學が作者の推理によつて智識的に小天地を構成するのと一般である。併しながら哲學も亦科學を閑却することは出來ぬ。既に明かにせられた科學の智識に牴觸せぬ範圍内に於て推理する。之れと同じく、小説も亦寫生を閑却することは出來ぬ。寫生文で勉めつゝあるやうな片々たる事實の寫生趣味も出來るだけ取り集めて補綴する必要がある。故に哲學と科學、小説と寫生文、各兩者の間に交渉は無いことは無い、無い事は無いどころか大いにある。交渉はある、併しながら其爲め兩者を混同する事は出來ぬ。哲學の目的は既明の科學的眞理の上に如何に推理的の天地を作るかに在る。此推理的の天地は科學の證明を俟たぬ天地である。いはゞ哲學者の頭の中で構成された天地である。事實を重んずる科學者の眼から見たら之は夢の天地である。小説の目的は寫生的の人事を材料にして如何に空想的の天地を作るかに在る。此空想的の天地は寫生をする遑の無い天地である。いはゞ小説家の頭の中で構成された天地である。事實らしいといふ事に重きを置く寫生文家の眼から見たら之れは夢の天地である。

寫生文の面白味は科學の面白味に似て居る。明白ではあるが小規模だ。小説の面白味は哲學の面白味に似て居る。不透明ではあるが大規模だ。

燈下梅白く　月下波晴し

（四）

世の中の實際の出來事は小説に在るやうな大事件がさう容易に有るものでは無い。大事件は無い事は無い隨分澤山あるが、一旦大事件となると小説に書いてあるやうな單純なものでは無い。たとへば小説では

鐵道線路を横ぎつて少し來ると怪しい男女に出會つた。近頃はやる心中ではあるまいかと思ひ乍ら五六町も來ると茶店があつたので休んだ。婆さんが釜の下をいぶしながら此村の某の息子と茶屋の女中との戀中の話をしだした。

と斯う書くのが小説だ。併し事實はさうあつらへ通りには行かぬ。若し寫生文であつたら

茶店の婆さんが何か男女二人の事に關した話しでもすればよいがと待つてゐてもちつともしない。後ろの山に初茸が生えるの、松茸はどうのと、餘計なことばかりをしやべる。

と書く。この方が事實だ。事實はさう旨く小説にはなつてくれん。又旨く小説になつたら其は小説らしい事實で、事實らしい事實では無い。寫生文としての價値は却て其爲めに減ずるかも知れぬ。

冬枯れて僞りならぬ徑かな

（五）

寫生文を書き馴れたるものが小説を書かうとすると一寸途方に暮れる。世上にありふれた小説を見るとあまり僞らしく其類のものを書く氣には固よりなれぬ。又事實〳〵と何でも實際見聞した事に材料を取る習慣がついてゐるので、其を小説にする爲め勝手に變化さしたり揑造したりすることは罪惡のやうな氣

がしてならぬ。

科學が直ちに哲學にならぬ如く、寫生文は直ちに小說にはならぬ。科學の上に推理を重ねて哲學になる。寫生文の上に想像を加味して小說になる。則ち如何にして想像を加味するかゞ問題である。

いろ〳〵方法もあらう。先づ第一歩として

寫生文には必ず出て來る「余」なる者を必ずしも作者其人とせず、之を種々假設の人物とする事、即ち從來の寫生文には虛子の書く文中の「余」はまがひも無き虛子自身、四方太の書く文中の「余」は四方太、鼠骨の書く文中の「余」は鼠骨といふ風に作者が必ず假面を被らずに居る。之が寫生文の一特色で讀者をして實らしく感ぜしむる要素の一つである。其を「余」といつて其實作者自身とせず市役所の小使とか電車の御者とかいふ者と爲し、作者自身が市役所の

小使、電車の御者の積りて實世間を觀察し(矢張寫生文的に)描寫する事。

小說は人物をも事件をも作者の頭で構成するのであるが、先づ手始めとして人物(而かも「余」といふ唯一人物)のみを假想して事件は寫生文通り矢張り實世間から正直に取つて來るのである。尤も「余」といふものを作者以外の境遇性質の者と假定してかゝるのであるから其觀察が自ら作者自身のものとは變つて來なければならぬ。作者が假りに其境遇性質の上に自己を設いて色眼鏡を掛けて觀察せねばならぬ。此色眼鏡を掛けた點が寫生文には全く無い處で、小說に進まうとする所謂第一歩たる處であるが、尙寫生文根本義たる實世間の寫生といふ事は其儘に保留されてあるから、寫生文家に取つて比較的困難事ではあるまいと思はれる。

第二歩第三歩には種々方法もあらう。先第一歩として余は此方法を寫生文家に